幼児の教育　昭和63年1月1日発行(毎月1回1日発行)昭和23年4月15日第三種郵便物認可　第87巻　第1号

N24
1
87

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1988 1

お茶の水女子大学
昭和
63.2.15
受入
附属図書館

お茶の水女子大学図書
平成元
208365

第 87 巻　第 1 号　日本幼稚園協会

自費出版のご案内

手間のかかる作業は、お手伝いいたします。

記念の本づくりを、なさいませんか。

●内容、装幀、部数など思いどおりになる自費出版。手間のかかる編集作業は、キンダーブックや優良保育図書、雑誌などを手がけてきたプロの編集者がすべてお手伝いします。

●お気軽にご相談ください。

●完成したご本については、小社の宣伝ルートを通じて全国にご紹介いたします。

1.本の内容は　自叙伝、童話集、絵本、園の記念誌、研究集録、随想集、作品集など、ご随意に。

2.製作部数は　1,000部以上がお得です。

3.製作期間は　原稿頂戴から完成まで、約3か月見てください。

4.本の大きさや体載は……大きさはB6判、B5判、A5判など。製本は、上製本から並製本カバーつきまで各種あります。お好みのままに。また表紙などはご希望のセンスを尊重してご相談に応じます。

5.本文は　原稿用紙に書かれたものでも、テープに吹きこまれたものでも、結構です。綺麗でわかりやすい組み方にいたします。

6.絵や写真は　もちろん結構です。カラーのご相談にも応じます。

契約から納入まで
60～90日ぐらい
見ていただきます。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

記念の本づくり係　〒101　東京都千代田区神田小川町3-1
TEL　03―292―7788
（ご連絡はお近くの小社代理店・事業所にどうぞ）

幼児の教育

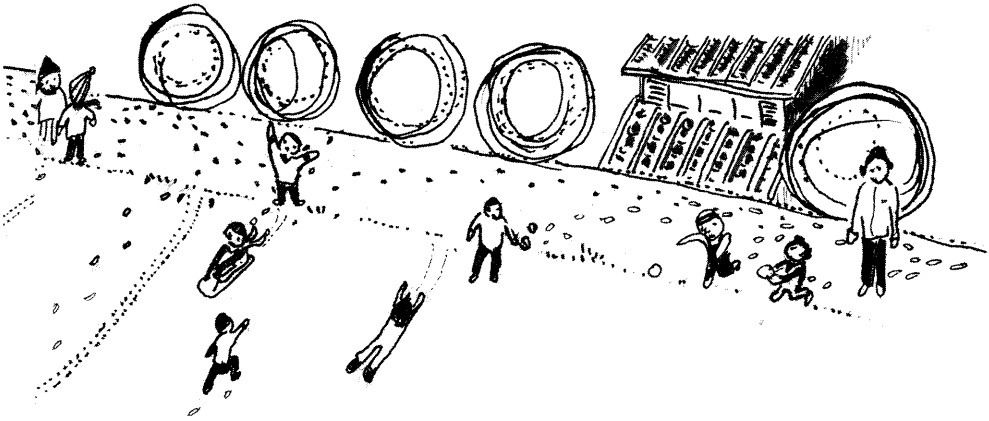
第八十七巻　　第一号

幼児の教育　目次

——第八十七巻　第一号——

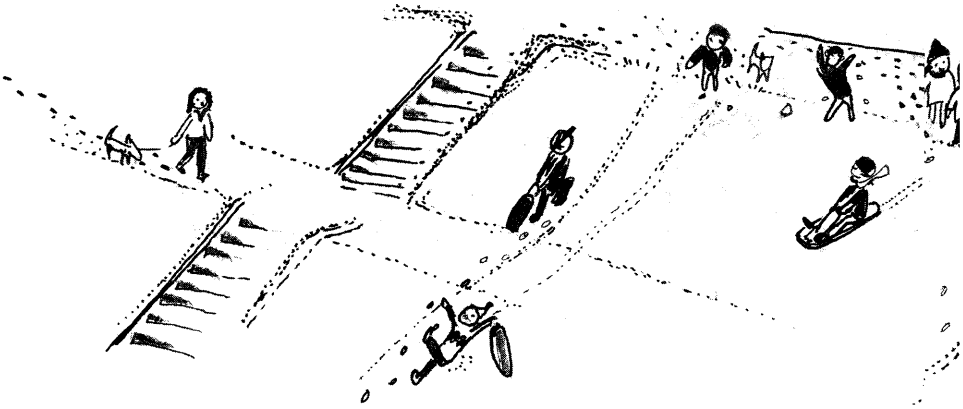
世界史の中の現代の幼稚園の課題
——ヨーロッパ会議報告書に見る——……津守　真…（4）
SF的読み解き　子どもという風景
第三十三回　「現代」のふくみ……堀内　守…（12）
ふくろうのつぶやき
——育つには、時とリズムが——……真壁　伍郎…（22）
「緑のオームと三つの宝もの」
——中国のむかし話——……近藤　伊津子編…（35）

© 1988
日本幼稚園協会



子どもの会話（その五）……無藤　隆…（38）
もう一つのカナダ
――いま、極北の子どもたちの周辺で――……鍋谷　智恵子…（44）
一歳六ヶ月児健診経過観察における遊びグループ指導の展開その2
上垣内伸子　古屋喜美代
市川奈緒子　山崎　聡子…（53）
若いお母さんたちへ……はるにれの会　橋本　都…（57）

カット・福田　理恵
編集部・小澤　誉子
土屋真美子



世界史の中の現代の幼稚園の課題

――ヨーロッパ会議報告書に見る――

津守　真

一

最近送られてきたヨーロッパ会議の教育プロジェクトレポート「移民の教育・文化の発達」[注]に、私は感銘をうけた。

この二十年間に、ヨーロッパでは外国からの移住者を、これまでにない程多数受けいれなければならなかった。東南アジア、トルコ、アフリカその他の国々からの移民の多くは、現代では新たな定住者であり、その子どもたちはいまや就職の年令に達した。この間に学校が経験したことは、ヨーロッパの教育に大きな変化をもたらした。一九八六年十二月に刊行された、ヨーロッパ会議（Council of Europe）のプロジェクトNo・7「移民の教育・文化の発達」[*注]の最終レポートは、この問題を扱っている。

日本には移民が少ないからこの問題は関係がないなどと云うことはできない。外国にゆく日本の子どもたちが、西欧の学校ではすぐに馴染むのに、日本の学校にも

どったときには、多くの問題を生じていることも、この問題と関係がある。また、日本の社会全体が、移民を受けいれるのに抵抗があり、この問題と直面することを拒否している。西欧の教育者たちは、過去二十年間、この問題と真摯に取り組んだのだと思う。

このレポートで、異質な文化を統合する教育の考え方を、インターカルチュラリズム（Interculturalism）と云っている。その根底には、次の四つの要素があるという。

「a、今日までの歴史において、われわれの社会の多くは複数文化によって成り立ってきたし、今後、次第にもっとそうなるだろう。

b、それぞれの文化は、自身の独自の文化をもち、それは尊重されねばならない。

c、ひとつの社会の中に複数文化があることは、社会の潜在的財産である。

d、複数文化を現実に社会の財産として生かすためには、そのいずれの独自性をも消すことなく、相互交流と相互作用をなしとげなければならない。われわれは、複数文化の力学を生かしてその状況を真に異文化間教育の場としなければならない。」

すなわち、ここでいう異文化間教育（Intercultural Education）においては、同化ではなく、統合の原理が考えられている。たとえば、フランスの学校が、カンボジヤやアフリカの移民の子どもを受けいれたとき、フランス語とフランス文化に同化させるのではなく、それぞれの母国語をできる先生を用意し、両者が共存してひとつの学校社会をつくるようにするのである。実際には容易なことではないだろうと思われるが、相手を生かす道を最大限に開いてゆこうとする考え方である。

自国の文化の過去の伝統に固執するのでなく、異質な文化を統合することにより、生命力を得て新たな文化を未来に向って創造することができるとの考えが根底にある。

報告書は三部より成る。第一部「今日の異文化間教育――方法論」　第二部「ヨーロッパにおける移民と社会――最近の変化とその教育的、文化的意味」　第三部「展望と結論」　全体で一〇八頁に及ぶ大部の報告書である。

二

報告書は、ヨーロッパ共同体（EC）加盟十数ヵ国の代表から成る委員会によって作られた。第一部にこの委員会の考え方が率直に述べられているので、次にその部分を主として紹介したいと思う。

①　「われわれは、象牙の塔に終止符をうち、真空の中で仕事をすることをやめた。ここで考えられている問題は、開かれた心、たえざる討論、常に変化する現実に注目することと、一緒に仕事をしてゆく心の準備とを要求している。」（P・2）

このことは委員会の基本的態度を示している。委員会は既にあるいかなる専門の権威に頼るのでもなく、動いている現実と取り組むことを最初にきめた。この点で、はじめから方向は明瞭であった。また、委員会は全員の納得のもとで進められた。委員長は単独で決定をせまられることはなかった。各メンバーがそれを助けた。

現代の特色は専門領域の増大である。それは知識の技術化を反映している。「社会関係、人間関係の複雑な分野で技術的性格が増大することに伴う危険は、明白かつ多大である。人々は、自分と他者とに関する重要な決定をするのに、その責任を専門家に委ねてしまう。」委員会は専門家に頼ることをしないところからはじまった。

②　「この問題に関しては全員が同舟であった。」（P・2）

異った文化からの子どもたちが現実に周囲にいること、その教育問題が眼前にあることに関しては、委員会の全員が同じ運命の中にいることを自覚していた。その

故に、この報告書でとられた方法が全員一致で採択されたのであった。この異文化の問題は、不平等と葛藤、対立と抑圧、差異と反感と同時に、寛容と開かれた心、共通の目的と協力、親近感と同情を内に含んでいる。そのことに気付いたときに、移民の問題は、「歴史の全体が関与している問題」であることへの洞察が生れたのであった。「このことが、委員会が何故に、インターカルチュラリズム（異文化間教育）という考えを採択したかという理由であった。」

③　異文化間教育は、引力の法則や科学的知識のような科学的に証明されたこととは異なる。それは教育的選択である。したがって、これは「現実であると同時に賭け」（P・4）である。きまった手順に従って実施すれば成功するという性質のものではない。

これは理想を追い求める「自由主義」の考えとも異る。ここには、ひとりひとりの子どもが最善の発達をするようにという現実の課題がある。問題は何が望ましいかではなく「何が存在するか」であり、「未来ではなくて現在が重要である。」

④　一度限り、権威ある記述をすればそれで事足りるとの考えは、独断的態度と無意味なおしゃべりへの第一歩である。最初から、委員会の共通の関心は、現実を動かないものに固定することではなく、動いている現実の中にある本質を発見することであった。すなわち、現実を構成しているエレメント（要素）を発見することではなく、エヴォルーション（展開）の語で考えることであった。

⑤　科学性を主張する人は、観察しうるものがないからと云う理由で、まだ目に見えていないものの存在を拒否する。これは人間科学の分野が一世紀前からぶつかった問題であった。「変化への敏感さとそれを記録する能力は社会科学の中心をなす。」（P・6）すでに存在するものを観察するだけでなく、現に行為しているわれわれと

の関係の中で変化しうるものに着目せねばならない。

社会・歴史的概念は、人間によって構成され、たえずつくりかえられる性質のものであって、観察されたあらかじめ存在する現実に付せられるラベルではない。「もしも人間科学の知識が、経験的観察という単一のテストに耐えねばならないとしたら、それは存在しないことになるのみでなく、科学者は手を持たないことによって手をきれいにしておくという古典的ジレンマに陥ることになる。」

「インターカルチュラルということを、概念としても現実としても存在しないと見なすことは、科学的というよりも実証主義者の態度である。これは科学的方法論全体としては、ハードサイエンスを含めてもはや通用しないことは、バシュラールが十分に論じたところである。」（P・6）

そこで二つの立場がとられることになる。第一は状況を人間学的に分析することである。第二は科学がつくられる前にアクションがなされねばならないことである。科学は終りなくつづけられる問いであり、アクションは一般的方向がきまれば、なされうる。

⑥　移住者の教育は、いわば磁石と地図だけを手にして、常に進行しつづけなければならぬ。何となれば、状況がそれを要請するから。外国人嫌いと民族主義の復活を考えただけでも十分な証拠であろう。図面が完全にでき上るまで何もしないとしたら、とり返しのつかないことになるだろう。

「われわれは狭い意味での実証主義的技術主義から手を切らねばならぬ。また制服を着たような単純な運動主義を避ける。（それは差し迫った理由の故に、また、教条的イデオロギーから見境いなく敢行する）」（P・8）

⑦　伝統的分割や、前もって考えられたいかなる分類をも拒否すること。民族主義と外国人嫌いを拒否すること。「拒否はそれ自体肯定である。われわれはこれを望まない。もはやそれはわれわれが受けいれることのでき

ない考えである。われわれはそれと戦うと云うことである。」（P・8）このことは、過去においても現在においても、民族主義に反対するすべての行動の基本である。たとえまだ詳しく説明できなくとも、何に反対するかに関して疑いを残さないことは重要である。

⑧　「インターカルチュラリズム（異文化間教育）の主張は、プリンシプルの宣言である。それは現在の状況とは明らかに対照をなす目標、従うべき方向を探し示す。それは志向される方向である。」（P・9）何を拒否するかについて一致していれば、意見や理論は異っていても協力することができる。

方法論的にも、認識論的にもあらゆる条件が保証されてから着手することも可能であろう。しかしそれでは論点は「歴史の風の中で」雲散してしまう。処方箋は成功しても、患者はその間に死んでしまう。それでは未来は築かれず、人々は自分がコントロールできない事柄に依存せねばならなくなる。

報告書の第一部の概要を紹介したが、委育会が、人間として率直にこの問題に取り組んでいる姿をうかがうことができる。このような報告書を公共のものとして作ったヨーロッパの教育者たちの見識と勇気に敬意を表せざるをえない。報告書はひきつづき、第二部で具体的提言に入り、その中に、家庭、就学前施設、義務教育、職業準備教育、職業教育、地域、情報メディア、芸術分野とこまかく述べられている。

また、教育と文化とは切り離しえないこと、子どもと大人とは常に一緒に考えられねばならないことが一貫して強調されている。

三

画一化は、ここでいうインターカルチュラリズム（異文化間教育）とは対照的である。

よく考えれば、教育の場は、どこでも、異文化の子ど

もたちの集まる場所である。現代の世界の特色である異民族間の交流は、すでにある教育問題を拡大して見せているにほかならないのではないか。

日本の教育は、同質に近い集団の中で、ごくわずかの異質性すら容認できないでいるのではないか。大多数の社会に適応している人々が、異質な少数者がこのように振舞わざるをえない状況を同情的に理解することができないでいる。国際教育は、外国語教育以前に、異質な他者と一緒に共同の生活をつくる体験をするという基本的なことにこそ第一の課題がある。それは幼児期からはじまる。

幼児の集団は、本来、最も民主的になりうる基盤をもっている。皮膚の色が異り、言語や行動の仕方が異っても、保育者がしっかりしていれば、幼児同士はすぐに一緒に遊べるようになる。そして、大人が予想する以上に、力動的でたのしい集団をじきにつくり上げる。そのような体験をした子どもは、異質な他者を、自分の仲間と感じ、それは一生を通じて他者を受けいれる基礎となるであろう。

自分と違った人を受けいれて共同の生活をつくることは、いつの時代にも変ることのない幼児教育の課題であったし、これからの世界でますます重要な課題であろう。

幼稚園・保育園は、異質な子どもたちを入園させるだけでなく、保育の質を真にインターカルチュラルにしてゆくことがこれからの課題であると考える。

おわりに

私は最近ＯＭＥＰ（世界幼児教育機構）の日本国内委員会の世話役をしている。その関係で、ヨーロッパ共同体（ＥＣ）の出版物が送られてくるとすぐに目を通す機会に恵まれた。

また、ＯＭＥＰの推進者であるヨーロッパの幼児教育の指導者たちに直接ふれるとき、このレポートにみるような、広い視野に立った建設的な世界の息吹きを感じさ

せられる。

五年前、一九八三年の一月号の本誌に、「下降する時代の保育を考える」と題して書いたとき、私はヨーロッパを下降する社会のひとつとして認識していた。いま私はヨーロッパを違う眼で見るようになっている。

これからの世界は、アジアやアフリカなどを含め、多様な社会の往き交う場である。そのときに、この報告書にみるような教育・社会の理念は、ヨーロッパ文化の産物であると共に、世界が共有しうるものであると思う。

前述の私の小論に「子どもが生き甲斐をもって充実した生活をできる保育の小さな現物がひとつでも増すならば、暗い社会はそれだけ明るさを増すのだと思う。」と記した。ひとりの人のかかわりうる保育の現物は、小さく、微力である。しかし、互いに異質な大人と子どもが、それぞれを生かしながら共同の生活の月日をつくってゆこうとするとき、そこには明るさが生れる。

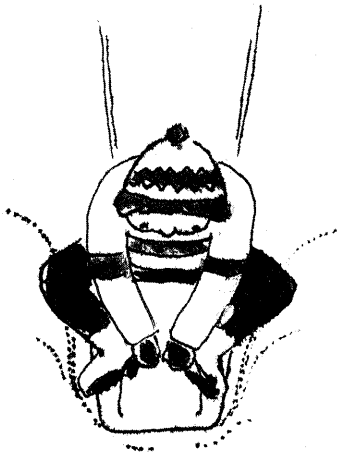
（愛育養護学校）

注　Council of Europe: The CDCC's Project No7: "The education and cultural development of migrants". Finalreport of the project group. Council For Cultural Co-operation, School Education Division, Strasbourg 1986, Chairman, M. Louls Porcher.

SF的読み解き　子どもという風景

第三十三回 「現代」のふくみ

堀内 守



時間の伝説

その人が現代に生きていたら、いちどでいいから会ってみたい。そう思える人の名前を並べてみた。

現代は奇妙な時代で、テレビでよくお目にかかるタレントさんや有名人にいちど会ってみたいという人がいる。実際に会ったとする。

感想の中心にあるのが、「あ、やっぱりテレビで見たとおりだ」というものだろう。それは、「やっぱり」というところに力点がある感想である。「とおりだ」というのは安心感を物語る。

こちらの方は少なからず別のことを考えている。平凡な「やっぱり」では面白くない。「見る」だけで、姿かたちが「テレビで見ているのとおんなじだ」と安心するだけではつまらない。何よりも、語り合ってみたい。叱られるかもしれない。門前払いを受けるかもしれない。それでもかまわない。

会ってみたい人のリストには、孔子様だの、キリスト様だの、ソクラテス様だの、二百人余の名前があがって

いる。いずれも立派な人たちである。あまり有名でない人のリストもある。魅力のある人名もある。

これらを目の前の紙に書きつらねて、いろいろ想像しているうちに、ふしぎなことに気がついた。この所行自体が少なからず「こどもこども」しているのだが、書かれた方の人たちも、どことなく「こどもこども」している——そう思えてきた。

ひそかに慮(おもん)みるに、この「こどもこどもしている」という表現はなぜ成り立つのだろうか。

二百人余の名前を眺め、その名のまわりに集まってくるさまざまなイメージについて戯れているうちに、「こどもこどもしている」ということは、学問的な分析をのがれ、勝手に動きはじめた。

たとえば、このリストの中には十六世紀から十七世紀にかけて、せっせと辞典編集に熱中したセバステイアン・コバルビアスの名がある。大変な碩学(せきがく)で、部厚い（というよりも厖大な、というべき）辞典を著した。この人に会ってみたいと思ったのは、彼にはこんな話が伝わっているからである。

彼が日夜熱心に辞典の原稿を執筆していたときのこと。途中で「時間」ということばにつき当たった。これを何と表現していいかわからなくなった。いろいろ考えたあげく、このむずかしいことばを説明するには古(いにしえ)の人が書き残した文章を参照するのがてっとり早いという結論に達したというのである。そこで、いろいろな先人たちの書き残したものを調べはじめ、とうとう「時間」の定義の複雑さにサジを投げたという。

「こどもこどもしている」とは、たとえばこういう人をさしている、と考えてみる。

すると、コバルビアス氏の思想と行動が一段と愉快に描けるのではないか。早い話、辞典を編集するという仕事は、今日でもそうだが、労多くして、それこそ時間との格闘のようなところがある。性急な人、短気の人には無理だ。どこか執拗で、粘着力があり、要するに、「しつっこい」人でないとつとまらない。この「しつっこさ」が、ある限度を超えると、定義の定義、そのまた定

義のように、先へ先へとつき進んでみたくなるのではないか。

ただし、この「しつっこさ」は、オリジナルな仕事には向いているのだろうか。コバルビアスは、参照につぐ参照をし、注をつけているばかりで、オリジナリティのある本が書けない人に似ていないか。そんなふうに考えてみる。すると、「こどもこどもしている」というのは、ある逆説を秘めているのがわかってくる。つまり「こどもこどもしている」のはオトナの方なのだ。まじめの上にもまじめで、そのまじめさを自分で気づいていないような、滑稽な人に転じてしまうのである。

幕間

さて、そのコバルビアス氏は、「時間」についてピタリとした記述ができないのに気がついた。そこで、彼は、紀元前二世紀のローマの最大の人文学者のひとりであるウァロ氏の文章を借りることにした。

そこにはこう書いてある。

「時間は世界の運動の幕間なり。時間はとりわけ太陽と月の運行によっていくつかに分かたれている」

ローマの人文学者というところにこだわらないでこれをごらんいただきたい。いくつかのむずかしいことばを少々くだいてみると、今日でも通用しそうなことが書かれているのがわかるであろう。これは、いかめしい定義でも何でもないのである。

少し「こどもこども」した表現に直させていただく。

第一の型　「時は世の中の動きの幕。太陽さんとお月さんの動きで歳月が生まれる」

第二の型　「時は芝居の割りつけ。お日さまとお月さまが割りつけてくれるもの」

第三の型　「時は世界の時間割。陽と陰の力で歳月を生む」

このように、「こどもこども」した方法で少しずつ変換していくと、何のことはない、今日の私たちの心情の深いところにある時間論とどこかで共鳴するのがわかってくる。

コバルビアスさんの貢献は、彼があちこち文献を渉猟し、今日の私たちに面白い表現をたくさん残してくれたことである。そして自分の辞典に『宝典』と名をつけた。

すごい名前だ。一方では感心していただいてよろしい。しかし、次の瞬間、こんな表現は、ザラにあったということにも目を向けなければならない。実際、この表現は今日でもよくお目にかかる。

そう思って、よく見ると、「宝典」は、今日でもそれほどの衝撃力を与えないのではないか。

でも、わが編集した辞典に『宝典』と名をつけたコバルビアスは得意だったようだ。なぜか。それは彼が異教の詩人や哲学者の書いた文章や詩を引用し、密度の濃い注釈をつけたために、その時代の多くの人びとがこの辞典を重宝な辞典として使ったからである。

いま、なに気なく読まれたはずの「重宝」ということばにも「宝」という文字が使われている。そのいわれは今日ではほとんど知られていないし、問おうともしないが、もともとはコバルビアスさんのような人が苦心して編集した辞典をありがたく使わせていただく気持から生じた。今なら「便利な辞典」が売りものになるのだが、昔は「重宝な」が、ことばどおり生きていた。

とはいえ、その辞典を使うたびに、いちいち編者の名を唱えて感謝して使ったというようなことはなかった。心の中で、ひそかに感謝するだけでもよかった。

コワイ時間

「時間」の定義は、あるところから先へいくと、よくわからなくなる。最大の難物なのである。そこで、どちらかといえば、時間の定義よりも、時間をどのようなものとして感謝していたかの方が面白い話題になるのである。

古典ギリシアやローマの神話などは、あきれるほど豊かな時間論を提供してくれるが、傑作なのは「時間」がコワイ姿で表現されていることである。

羽毛が生えている。裸である。杖をついている。その

くせ飛翔する。自分が生んだ子どもを食べてしまう。気づかれぬように世界に迫ってきて、全世界を苦しめる。

霊感を受けた人びとは時間をそのように描き出している。首尾一貫していないところが「こどもこどもしていて」面白い。

右の時間の姿かたちには、異教徒ばかりでなく一般大衆の感じ方も大いに「重宝」がられて使われていると見てよい。信念や祭礼などにかかわりのある痕跡は、そういうさまざまなたとえばなしの中に脈うっている。迷信的で非難さるべきもののカタログがその中にひそんでいると見てよいだろう。

ルーベンスやゴヤの描くところのクロノスの姿やサトゥルヌスの暗く恐ろしい姿は、学校の教科書には盛り込められていないおどろおどろとした世界の存在を暗示しているが、宗教的情動の姿はこれらと共鳴するところが多いのである。

青年時代は、こういう共鳴から身を遠ざけ、できるだけ合理的に処理しようと努める時代である。だからこういう恐ろしい姿に対してはつねに懐疑的な姿勢をとる。個人的にもそうだ。団体としてもそうだ。

だが、人間の存在という観点から見ると、死と生が交替したり、陰と陽とが交替したり、運命が力をふるっているように見える。こういう面は、劇的によろこびや悲しみを体験する現実としてあらわれる。死と生、よろこびと悲しみ、失意と輝き、寒さと暑さ、これらはいずれも多様なできごとが生きられている場にほかならない。

情念の広がり

明晰で、透明な、とは理論についてのほめことばである。明晰過ぎて、味もそっけもないような理論もある。もちろん、味のある理論もある。その場合の「味」は、単なる明晰さを超えて、私たち人間を包み込む抱擁力のある理論であろう。

愛とか悲しみとかに心動かされなかった人間はいない。それなのに、あたかもそれがなかったかのように、「冷静」であることが理論を生むのだというのは、ここ

二百年ほどのあいだに生まれた考え方である。むしろ、たえず、また繰り返して、愛とか悲しみは問題になる。個人的にもそうであろう。また集団的にもそうなのではないか。

こういう面まで含めて考えないと、喜びの日や祝いの日がなぜあるのかが説明できない。また、妬みや敵意などを集団的に許す日を設ける意味はわからないであろう。「理解」ということばは、「理」に「解」と書くが、その具体的ないとなみは、その文字面の意味よりも深く、情念のレベルにまで届いている。

あのコバルビアス氏は、言外にほぼ右のようなことを示唆しているのだ。だから会って語ってみたい人の一人に挙げている。

あえてこういう「こどもこどもした」試みをして、ひとりで悦に入っているにはそのほかにも理由がある。

どうも、このコバルビアス氏の考え方は、時空を超えて、日本の、山の中の小さな町に言い伝えられたもろもろの事柄に似ているのである。端的にいえば、私が子どもの頃聞かされた宇宙論に近いのだ。佛教――といえるほど体系化していない信仰、もろもろの親しみある神々と邪神が共存していて、どこにもいつでも神々がいた。一年中、どの日もかならず意味を与えられていた。「きょうは何の日」「明日は何の日」と問えば、答えがちゃんと戻ってきた。だれだれの誕生日というような場合よりも、悲しみの日と馬鹿騒ぎの日が続き、日頃さえない顔つきの人が急に人気者になり、若い者に下知していくリーダー格に変身することもあった。

しきたりを熟知している老人が、おごそかに場の雰囲気を盛りあげてみたり、子どもたちが突如高貴なしぐさを演じるように教えられたり。

いちばん変なのは、こういうものが忘れ去られたということよりも、それを忘れてしまったのだということを忘れているということである。

だから、コバルビアス氏に会って、語り合っているうち、自分の心のどこかにまだ眠っているはずのことが引き出されてくるかもしれない。いや、その可能性は十分

にある。

別の理由もある。

コバルビアス氏に会って、あれこれ話がはずんだとすると、この碩学のことだからきっと、古代から中世の有名な人たちの書き残したものについて説明したあと、きっとこちらに向かい数々の問いを発するに違いないのである。その質問を想定してみるのも「こどもこどもしている」ことかもしれない。だが、相当の努力を要することでもある。

かりに、氏が私たちに向かってこう質問したとしよう。

「やあ、二十世紀の人よ。そちらの世界では、私が苦心しても説明しきれなかった『時間』というテーマはどのように展開されているかね」

あれこれ、考えたあげく、この答えを練り直し、コバルビアス氏にわかるように噛みくだいて説明することが必要になるのだが、たぶんそう歯切れのいい答えにはなるまい。あげくの果て、私たちは、コバルビアス氏が、けげんな顔つきをしたり、苛立ったり、ふしぎがったりするのに出会うことになろう。

もし、氏がニッコリと笑ったらどうなるか。その「ニッコリ」は、「わかった」という意味のニッコリなのか、それとも「二十世紀の人にもできないのか」という「してやったり」式の笑いなのか。どうも後者のような気がする。

メモ魔

コバルビアスの記述しているなかでいちばん面白いのは「カーニバル」についての記述であろう。まったく、この記述魔のごとき、メモ魔のごとき人物は徹底してカーニバルの起源、意味、数々の行事、そのいわれ等についてこってりと書き記しているが、実は私たちから見れば、そこに記されているのは、生き生きとした子どもの遊びにほかならないと読める。たとえば、コバルビアスは、同時代のマドリード（申し遅れたが、彼はスペイン人である）の下町のカーニバルについてのべながら、女

の子たち特有の遊びについて説明している。それによると、女の子たちが、通りを行く人たちに爪先立ちで近付いて、棒切れあるいは紙切れの端をくっつけ、そうしながら次のようにうたうというのである。歌の文句は

棒っ切れをよこしてよ
子ロバが広場に
持ってくよ

と、いうようなハヤシコトバになる。

あるいはまた道化の衣装について記したり、子どもたちが顔に墨を塗り、ブリキ罐やゴザを引っぱりながら、思いっきり大きな音をたてながら町をねり歩くこと、同時にオトナたちも爆竹を鳴らし、土鍋や罐を鳴らしたりすると記している。その記述は淡々としているというよりは、あちこち余分なところに入りこみ、横道にそれ、あるできごとの起源に進んだり、別の考証の引用になったりして、それ自体が迷路のように入り組んでいる。

性急な人は、コバルビアスの記述をいいかげんなところで放り出してしまうかもしれない。腹を立て、この著者の文章はなっちゃいない、と怒鳴るかもしれない。

でも、それはもったいない。このゴタゴタした、ごった煮のような記述のなかには恐るべき視点が感じとれるのだ。それは、平板な記述に甘んじないという姿勢である。謎解きを楽しんでいるようなところもある。現にコバルビアスの記述のなかには「余分な記述」と片づけるにはもったいないような象徴的な記述が光っている。たとえば、土鍋を割るということの象徴的な意味について、彼は、あちこちの地方で行われている習慣を書き並べ、サモラでは教会の天井から水瓶を吊るし、それが天井にぶつかるまで勢よく揺するとのべたあと、その意味の考証に移る。見たところバカバカしいような所行のあいだ信者たちは口々に唱えごとを口にし、自分たちの弱さに思いを致すというのである。

傾聴すべきことばではないか。ドンジャカ騒ぎは、人びとが自分の弱さに思いを致すことに通じているのである。とすれば、この厖大な記述自体がコチコチの人にできることではない。コチコチの学者然たる人物ならもっ

と系統的に分類を試み、横道にそれるようなことはしないだろう。むしろ、コバルビアスは、この厖大な著作を通じ、ただ一言「人間の弱さに思いを致す」ことを試みているのではないか。

だから、彼の記述はきまり切った枠をはずれてしまい、気のおもむくままにはみ出していく。そのはみ出し方は偶然とはいえない。

やさしさ

知をひけらかすことに近く、いろいろ調べたことを並べてみせるような場合がある。かと思うと、道路の交差点でどちらへ行こうかと迷い、あるいはどちらの説に軍配をあげようかと迷っている子どもの行司のように見えることもある。

人間の弱さを承知の上であれこれを眺めてみることによってコバルビアスは、子どもとオトナがそれほど差異のある存在ではないというメッセージを発信している。

小憎らしいような文章もある。世の中の諸悪を糾弾するとき、人はかならず自分を正義の味方の側に置きたがる。だから、それに思いを致す必要があるというのだ。相当しなやかな人でないと言えないことばではないか。またそれを一般化して、人間の弱さは、自分を無意識のうちに例外に置きたがることだと言っている。例として挙げられているのが次のような祭りだ。

スペインには聖アゲタ祭りがある。聖アゲタは三世紀のシチリアの聖女でアガタとも呼ばれるが、彼女の殉教の有名なエピソードが両胸を切り取られたというところと、その後天使によって胸が癒されたというエピソードである。

授乳する女たちの守り神となり、また胸の病いの守り神ともなった。だから、この祭りの日には女たちは元気よくグループに分かれて、踊ったり、喜捨集めをしたり、敬虔な人のひんしゅくを買うような装身具を身につけたりできる。多くの町では、男たちはアンジュラスの鐘が鳴るまで家事一切を引き受けなければならない。

この「一切を引き受けねばならない」ということの言い抜けの例がずらりと並べられている。からだの調子がよくない、急用ができた……すべて私たちにとっておなじみのものばかりである。だが、コバルビアスはこれらを記述したあと、こんなに人間は自分だけを例外にしたいと考える悪知恵ももっている。ならば、その弱さに思いを致し、大らかに足もとを見つめ直そう、と。

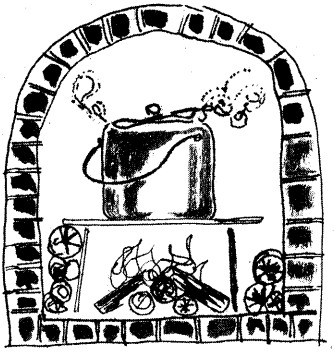
彼の記述のすべてが人間をそのような目で見ているように思えてくる。まず第一に訊ねてみたいのは、「コバルビアスさん、あなたは子どもが好きですか。いまの自分のなかにこどもこどもしたところがあると気づいていらっしゃいますか」という質問だ。

この質問を、ソフトもソフト、超ソフトでたずねてみたい。きっと、何時間ものおしゃべりとなるだろうと思う。

（名古屋大学）

ふくろうのつぶやき

——育つには、時とリズムが——



真壁　伍郎

だれに頼まれたわけでもないのに、文庫をやっていてなにが楽しいと聞かれれば、即座にこう答えましょう。育ってゆく子どもを見ること。そして、（ちょっと声を低めて）、妻と一緒に文庫をやっていること。

もちろんそのほかにも数えたてれば、楽しいことはいくらでもあります。本を読んだり、眺めたり、途方もないお話に、大人であるわたしが妙に感動してしまったり。でも、行き着くところは、はじめの二つです。

幼稚園や保育園へ行っていた子が、いつの間にか三年生、四年生になっています。一週間に一回の出会いを重ねているうち、ある日、ある時、子どもはびっくりするような成長した姿で、わたしたちの目の前に立っているような気がしてなりません。

子どもが成長するのは、決して直線的ではないなと、いつも考えさせられています。

もう一つの喜びについて触れておかなければなりません。これはもう、面白い、なるほど、と思わされるというしかありません。女性の目が子どもが育つのをどう見

ているのか、まして、それが幼稚園の先生であればと、あれこれ例をあげるいとまもないくらい、たくさんのことを気づかされ、教えられています。

この先生、といっても、妻のことですが、庭いじりが大好き。暇さえあれば、庭に出てあれこれ草木の世話をしている。なんとかの花がきれいに咲いているわよ、と時折わたしに声をかけてくれます。こちらは仕事が一段落したらと思いながらそれを聞いているものですから、どうれ、と見にいった時には、かんじんの花の名前を覚えていないというありさま。

庭のことはだめでも、家の中のことならと、わたしは家の掃除に精をだします。自称、掃除大臣。子どもにまでそう呼ばれたりしています。わたしの家のあたりは、ほとんどが砂地です。文庫の部屋も、子どもたちの出入りが激しくなれば、いきおい砂でざらざらすることもあります。

「ほら、よく、足をきれいにして！」などと、掃除大臣がいくら注意しても、子どもたちは、どこ吹く風。よく遊んでくる子ほど、砂だらけです。ある日、この大臣のいらいらを妻はさっと押しとどめてくれました。それもたった一言で、

「子どもが育つってことは、砂だらけになることよ」

なるほどと思ってしまいました。以後、家の中に砂があるたびに、育っているな、育っているな、と思うことにしています。

フレーベルが、キンダーガルテン（幼稚園）を創始したのは、一八四〇年のことでした。なにもこれが幼児教育の初めだったわけではありません。現にわたしが何度も訪ねていっている、西ドイツ、カイザースヴェルトのディアコニッセの「母の家」で、幼児のための教育が開始されたのは、一八三六年。その同じ年には、そこで、女性たちのための看護教育も始められています。近代看護の創始者といわれるナイチンゲールが学んだのもここでした。

もとはといえば、刑をおえた一人の女性の更生の仕事

から始まった、フリートナー牧師夫妻の働きが、やがて、看護、教育、福祉の分野にわたる女性たちの大きな活動と変わり、ここがその大切な拠点となります。この一連の働きの始まりを、ナイチンゲールは、こう語っています。

『われに汝の道を教え給え』とは詩篇におけるダビデの永遠の叫びである。神の道を見てそれを模倣しつつ仕事をするのは唯一の真の知恵である。小さな芽から森林樹になる過程は緩慢すぎて、その芽がいつ、どのようにして大きくなったかは誰にもわからない。フリートナー牧師は小屋の二つのベッドから始めたのであって、空中楼閣のような幻想から始めたのではない。カイザースヴェルトは、いまやその祝福とそのディアコニッセとをほとんどあらゆる新教の国々に広めている」

同じ時代に、同じように幼児の教育に手を染めることになった、フレーベル（1782〜1852）とフリートナー（1800〜1864）。彼らはそろいもそろって、女性の能力と資質に深い理解と期待を寄せていました。それだけに、真剣に女性たちの教育のことも考えました。そののち、ほとんどの女性の独壇場とさえなってしまう看護と幼児教育。その発端に、こうしたフェミニスト兼、高邁な理想主義者がいたことは、わたしたちがよく覚えておいてよいことでしょう。

ただ、幼児教育のありかたについては、残念ながら、二人は意見を異にしていました。

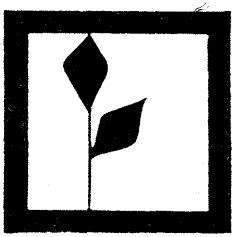
幼児の純真な存在のなかに、人間に生れながらにしてつきまとう罪の陰を認めるかどうか。そのあたりの違いが、具体的に、教育についての考え方、方法にあらわれてきます。事の当否は別として、結果的には、フレーベルの考えのほうが、その後の幼児教育の流れをつくることになります。

キンダーガルテン（幼稚園）。どうしてこの名が全世界に広まることになったのでしょう。わたしは、かねがね不思議に思っていました。キンダー（子どもたち）、そしてガルテン（庭）。「花園によい花の芽ばえが育つように、子どもの園、キンダーガルテン」としたという説

明を聞いても、なにかちょっと物足りない気がします。たんなる可愛さか、咲いては散ってしまう、花のもろさを思うせいかもしれません。砂だらけの手足で動きまわっている子どもたちを見ると、もっと力強いイメージがほしいような気がします。

「育つには、時とリズムがあるね」

文庫の部屋のふくろうが、だしぬけに妙なことをいいます。だいたい哲学者とか、そういったたぐいの人間は(そして動物も)、訳のわからぬときに、訳のわからぬことをいうものです。



話をもとに戻しましょう。ナイチンゲールの言葉がきっかけとなったのか、カイザースヴェルトのディアコニー事業団はいま、伸びてゆく小さな木の芽を自分たちのシンボルマークにしています。それを見ていると、ぐんぐん伸びてゆく木を想像しています。やがては、その木の陰に憩う人々もあることでしょう。たしかに、あの小さな田舎町で芽ばえた看護や福祉が、いま全世界の人々に恵みをもたらしています。しかも、それが主として女

性たちの手によって。

フレーベルが、キンダーガルテンの名を考えていたとき、彼の心には、庭師の姿が見えていたのではないかと思います。しかも、女性のです。木や花が育つには、どんな世話や注意が必要か。庭師はこれを心得ています。せっかくの貴重な芽ばえを無にしてはなりません。自分に託された草木の種類と性質を知って、その成長のために、庭師はいつも配慮しています。

ドイツ語で、幼稚園の先生のことを、キンダーゲルテネリンといいます。キンダー（子どもたち）を取り去れば、ゲルテネリンは、女庭師の意味です。なるほど、フレーベルは、これを思っていたのか、とひとり合点しながら、庭仕事に精をだしている妻の姿をながめてしまいました。

料理がうまい人は、カウンセラーに向いている。そんなことを、あるカウンセリングの先生から聞いたことがあります。さまざまな材料をそろえ、手を加え、熱を加える。ほどよく煮上るのを待っていると、おいしいごちそうができる。カウンセリングもまったくそのとおりだといいます。さて、この伝でゆくと、草木を育てるのがうまい人は、人を育てるのも上手なのかもしれません。看護婦さんたちのなかには、植物を育てるこつを心得ている人が多いようです。このひとたちの看護もきっとゆきとどいていることでしょう。幼稚園の先生たちは、はたしてどうでしょうか。

大学の教育でいわれる、セミナーまたは、ゼミナール（演習）も、もとはといえば、苗を育てる所、苗畑の意味でした。苗が育ってゆくための水や栄養、日あたり、風。さらに不思議なことに、苗は一本よりも、何本か一緒のほうがよく育つ。そのすべてを心得、配慮できるのが、庭師ならぬ、大学の教師の仕事というわけです。どうも、幼児教育といわず、教育の根幹には、育つ芽と、それに注ぎ、配慮してゆく庭師の姿があるように思えてなりません。こうなると、育つためには、土や砂がついているくらいは、あたりまえです。わたしには、それがなかなかわかりませんでした。幼稚園の先生が、わたし

にそれを納得させてくれました。

育つといえば、ひとの育つのは早いものです。それにくらべて自分の老いは、なかなか見えないものです。幼稚園の頃、家へ遊びに来ていた久美子さんが、もう三人の子どものお母さんになっています。そして、そのまん中の娘のひろ子さんが、いまは熱心にわたしたちの文庫に来ています。

「あなたのお母さんも、あなたくらいのとき、よくおじさんのところへ来ていたんだよ」

ひろ子さんは、目をくりくりさせながらそれを聞いています。

「あなたのお母さんも本が好きだった。こんどお母さんから、子どもの頃の話、聞いてごらん」

小学校二・三年生くらいまでの子どもたちには、きまってお父さん、お母さんに、借りていった本を読んでもらいなさいといいます。（これが、子どもを本好きにする最良の方法です。いろいろな国の児童文学の本を読んでも、どれにも共通してこの重要さが語られています。ぜひ大人たちに覚えておいてほしいことです。）そして、どの子にも、お父さんやお母さんの子どもの頃の話を聞いてごらんとすすめます。

これに、うまく応じてもらえた子どもたちは幸せです。勢いこんで、お父さんはこうだったんだとさ、と、報告してくれます。親も初めから親でなく、自分と同じ子どものときがあった。これが、とても不思議なのでしょう。そして親も語りながら、幼いときの自分の姿を思いかえしていたにちがいありません。これは、子どもたちが時の流れ、いのちの流れを学ぶ第一歩です。昔語りは、けっしてたんなる昔語りではありません。親はそれによって、自分のいのちのルーツに触れ元気づくでしょうし、子どもはこれからの自分の人生ストーリーを考えることでしょう。

子どもたちと向いあって話していると、普段なら思いもつかないようなさまざまなことが、子どもの頃の思い出そのままに、つぎからつぎへと心に浮んできます。

白雪姫のことにふれて、子どもたちにこんなふうにいいました。

「白雪姫は、七歳になると、とってもきれいになったんだって。おじさんは、ここにいるみんなもそうだと思うよ。七つになると、お母さんなんか、かなわないくらい、きれいになるんだよね」

子どもたちは、そうかなというような顔をしています。ただ、七歳の子だけがこれを聞いて、にこにこしています。

「おじさんは、昔から不思議だと思っているんだけど、三と五と七ってのは特別だよね。だって、三月三日、三・三は、おひなさまで、女の子の節句。五月五日、五・五は、男の子の節句。そして、七月七日、七・七は、七夕で、これはお姫さまと男の人が出会う日。みんな奇数でさ。そして、一一月になると、七・五・三。面白いね。それにしても、三月のおひなさまが先ってことは、女の子のほうが、先に大人になるのかな」。

まずは、学校では、決して話にはならないようなことを、このおじさんは、子どもたちと真剣に考えています。

七歳の白雪姫が美しいという話は、本当です。グリム昔話集を読んでみると、この七歳の白雪姫に、まま母であるお妃は大変な嫉妬をしてしまいます。殺そうとするのです。しかも、グリムの最初の版では、これが、まま母ではなくて、実の母でした。そうなるといっそう、この物語のすごさがでてきます。七歳の子をもった母親となれば、少なくとも三〇歳。もうすでに、容色、日々に衰え、といったところでしょう。

そう思ってみると、白雪姫の話は、実は、自分の衰えを受け入れることができなかった女性の話とも見ることができます。一方の白雪姫は、着実に、美しく成長しているのに。

子ども、そして人間の成熟には、リズムがある。それも七年を周期とするといったのは、最近あらためて光があてられるようになったルドルフ・シュタイナー（1861〜1925）です。これは、むしろ昔話や、わたしたちに古

くから伝えられてきているものの見方がそうだったといった方がよいかもしれません。白雪姫は、七歳になって、成熟の一つの節目を迎えています。そのあと、七人のこびとのところで、これもまた考えようによっては七年。そして、思春期をむかえる一四歳になると、娘は長い眠りについてしまう。同じグリムの「いばら姫」では、一五歳になると、姫はつむにさされて、百年間の眠りについてしまうことになります。一四歳が成熟の節目という点では、これも一致します。

蛇足ながら、白雪姫のお話でお妃が鏡にむかって、「鏡よ、壁の鏡よ、国一番の美人はだれじゃ」とたずねるのも、全部で七回。ただ、ここではなんの進歩も成熟も語られていない。外見の美しさしか追い求めえなかった女性の悲劇です。

いずれにしても、七が一つのまとまりであり、その積み重ねのなかで、育つということが考えられているようです。日曜日を週の初めの聖なる日とし、人は、一週一週、人生の旅路をたどっているのだ、というキリスト教の考えにも、明らかに大きな意味での「育つ」が含まれているにちがいありません。けっして、機械的な繰り返

しの七日ではない。繰り返しているようだが、それはちょうどらせん状の階段を登るように、上へ上へと向っている。木でたとえるなら、大きく上に伸びていっている木には、目には見えなくとも、確実に年輪の輪が繰り返し刻まれている。

子どもたちが大きくなるのもそうです。からだが育ち、心が育つ。しかも、その節目、節目に、その時々の顔がある。けっして平板に大きくなっていっているのではありません。葉が伸びる時には、葉が伸び、花が咲く時には花が咲き、実がなる時には実がなっている。それぞれ定まった時に、定まった内容を満たしている。そうでないと、けっして育っているということにはならない。大きくなるだけのことを成長というなら、その大きさにふさわしい内容を伴っているのが成熟です。そして、育つとは、この成熟のことをいうのだろうと思います。

では、その成熟の時はいつ訪れるのでしょう。いま述べてきたように、はっきり七年と定まっているのか。時を時計ではかることに慣れているわたしたちは、七年というと、すぐにその時間や月日を数えてしまいます。でも、そういうやり方で数えられない時がある。いのちが生みだされ、育つ（そして、死ぬのも）のをしるす時です。それはいのちの内側から「満ちて」ゆくのであって、わたしたちはこの時を「待つ」しかありません。

赤ちゃんの誕生のことを考えてみればいいでしょう。予定日は分っても、何日の何時、何分と決めてしまうことはできない。わたしたちはただ期待をこめて、その時を待ちます。待つ側にも、時の高まりがあり、生れ出る側にも、高まってゆく時があるにちがいありません。いのちを支配している「時」とは、このようなもので、この時はまた、「育つ」をも支配しています。人が計測可能な画一的な時の流れを時というなら、これはむしろ個別的な時の流れ、わたしたちの操作を拒む時だということができます。ですからわたしたちは、待つわけです。庭師は、この時に通じています。さらにいえば、女性たちは、この時については、男たち以上に通じているはず

です。生まれる場面、育つ場面、そして、死の床のかたわらに、なぜか女性たちは、「待ちつつ」居つづけました。

人が育っていくには、節目があり、段階がある。そして、それが不思議と、ある一定のリズムをもっている。シュタイナーのこの見方はなかなか面白く、ユニークです。たしかに子どもたちを見ているとそうだと思わされます。二年や三年ではなく、もっと長い時の広がりのなかで、子どもたちの育つのを見れば、それがよく分ります。

具体的にいえば、こうです。

成熟は七年を一つの段階としても、その七年の間に、三のリズムが刻まれている。体の部分の備わりかたからしてそうです。生まれてくる子は、まず頭が一番よく整っている。つぎに大きくなるのが、胴。そして、そのあと手足がぐんと伸びます。頭・胴・手足、頭・胴・手足、それが一・二・三、一・二・三と、ちょうど三拍子のワルツでも踊っているように、子どもは大きくなりながら、その中身を充実させていっています。そして、この三拍子の七年が三回めぐったところで二一歳、このあたりで大体は成人に達し、大人ということになります。

さらに、この三拍子のリズムを刻みながら、それぞれの七年の課題が備わっているともいいます。それこそ成熟の考えそのもののようで、とても面白い。

こうです。七歳までの子どもは、生理的成熟を課題とする。ですから、この時期、健康の基本となるしつけを身につけなければならない。健康教育こそ第一です。つぎの一四歳までは、心理的成熟の時期で、情操を豊かにし、喜怒哀楽の感情を知り、心の安定を味わわなければならない。つぎの二一歳までは、社会的成熟の時期、なにをして、どう生きるか、その決断ができるだけの社会性を獲得していなければなりません。

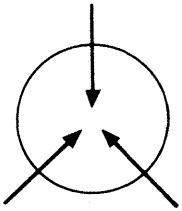
たしかに、健康でさえあれば、七歳の子どもは、その子らしい、実に整った姿をしています。この年ごろの子どもたちを見ていると、子どもという立派な作品がそこ

にあるという感じがします。

この時期をすぎて、三・四年生になると、子どもの内側から出てくる押し出しのようなものが感じられ、急に、その子らしい存在感が増してきます。

子どもたちのこうした成熟の過程にともなう心のありようを見事に図示したものがありますので、ここで紹介しておきましょう。子どもの心の内側と外の関係を示したものです。

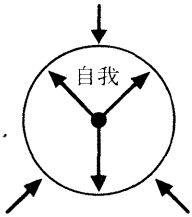
初めは（一）、外からの影響は、もろにその子のなかに入っていきます。これがしだいに、内に自我という種



（一）

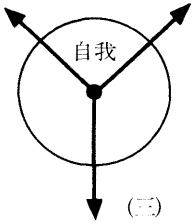
をもつようになり（二）、反抗したり、自分を主張したりするようになります。そうなるともう、外からの働きかけや影響は、子どものなかにストレートには入っていきません。子どもは子どもの内なる世界をもつようになります。「なにを考えているんだろう、この子は」と、親はこれまでなにもかもあけすけに見えていた子どものことで、いらいらし始めます。でも、子どもにとっては、この頃が一番夢をふくらまし、自分の心の世界にひたれる時期なのかもしれません。

つぎの段階は（三）、もう外からの働きかけは関係な



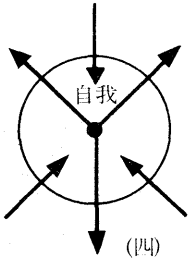
（二）

し。精一杯自分を外に向けて伸ばし、自分を主張してゆこうとします。そして、その伸びた手は、友だち、時には、異性に向けられます。親は寂しいですが、仕方ありません。思春期にあたるこの時期の子どもの心を宇宙ロケットにたとえた臨床家がいます。ロケットが宇宙に向けて放たれるとき、ある一定の区間、いくらこちらから信号を送っても、全然交信不能のところがあるそうです。そんな時は、送りだしたときの方向と角度を信じているほかはない。この時期の親と子の関係を、とてもうまくいい当てていると思います。



(三)

さて、最後の成人した人の姿（四）。人からの働きかけも受け入れ、自分からも外に向けて働きかけることができる。まったくわたしたちのあるべき姿で、もう大人の理想像としかいいようがありません。



(四)

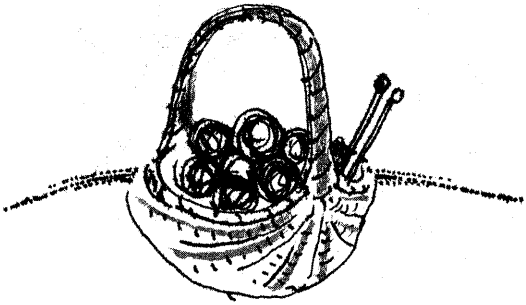
わたしは、時々、こうした図を思いうかべながら、子どもたちを見ています。みな、それぞれの人生の段階を生きているのだなぁと、あたりまえなことなのにひどく心を動かされてしまいます。いま、どんなふうにこの子たちのいのちのリズムは打っているのだろうか。やがて

年輪を重ねてゆく、その核となる中心は備わってきているのだろうか。でも、いまは小さいこの子たちも、やがては、大きく枝をはる樹となる。梢に天の風を受けては、ざわめき、木陰に、子どもたちを遊ばせ、また旅人を宿らせることもあるだろう。

「どうだね、森の木の一本一本が見えてきたかね」

森のあるじのふくろうは、思いにふけるわたしにこう呼びかけました。

（新潟大学医療技術短期大学部）



「緑のオームと三つの宝もの」

―中国のむかし話―

近藤伊津子編

むかし、むかし、あるところに息子とおっかさんがいました。とても貧しいくらしでしたが、息子は心やさしくおっかさん思いでした。

ある日、おっかさんは息子に、ありったけの金を渡して、世の中に出て、一もうけしてくるよういいました。

息子は市(いち)に行き、鳥売りのところで、ふと足を止めました。鳥かごの小鳥をぼんやりとながめていると「心やさしい人、わたしをたすけておくれ！」と、どこからか声がしてきました。

息子がおどろいて頭をあげると、籠の中のオームが言っているのがわかりました。嘴が赤く、緑色の羽毛は翡翠のように美しいオームでした。

息子は思わず手をのばして、籠を開けてしまいました。オームは飛んでいき、鳥売りの主人は、とても怒ったので、息子は、持ち金を全部はたいてしまいました。

文なしになった息子は、家に帰ることも出来ず、足の向くままに歩いて歩いて歩きました。いつのまにか森の中に入りこみ、それでも歩いていると、「やさしい人よ、わたしのあとについておいで」と、聴き憶えのある声がきこえて来ました。緑のオームが現われ、息子の前を高く、あるいは低く飛び、ある大きな木のそばまで行って「この木の下に黒いめんどりがいる。金の卵を生むとり。早くつかまえてお帰り」といいました。

息子は黒いめんどりをつかまえて、これで母親をよろ

こばせることが出来ると、足取りも軽く家に向いました。途中で、夜になってしまったので、ある宿屋に入り、そこの主人に「これは、金の卵を生むめんどりだ。どうか、大切に今夜一晩、あずかってほしい」と頼みました。それを聞いた宿屋の主人は、金の卵を生むという、ふしぎなめんどりを、どうしても、自分のものにしたくなり、夜中に、普通の黒いめんどりととり替えました。

翌朝、何もしらぬ息子は、黒いめんどりをかかえて、家に帰り、さっそくにおっかさんの前で、「黒いめんどり、黒いめんどり、早く金の卵を生んどくれ！」と言うと、ぽろんと白卵を生みました。

がっかりした息子は森にとんで行き、オームにわけを話すと、オームは「やさしい人よ、悲しまないでおくれ。この山のふもとに小さい寺がある。そこには、青いテーブル掛けがある。早く、それを持ってお帰り。いつでも、ごちそうが出て来るテーブル掛け、早く持ってお帰り」。息子はその寺に行ってみると、青いテーブル掛けがありました。ためしに「ごちそうを出しとくれ」と言うと、肉に、酒と、おいしいものが、たべきれぬほど出て来ました。

その日も、息子は、この前と同じ宿屋に泊り、夜中になると、青いテーブル掛で、ごちそうを出して食べたので宿屋の主人は、それをのぞき見て、またしても、その青いテーブル掛けを自分のものにしたくなりました。息子が朝、目をさます前に、ふつうの青いテーブル掛と、とり替えました。

翌朝（よくあさ）、何も知らない息子は、青いテーブル掛をもって、家に帰りました。そして、さっそくにおっかさんの前で、「青いテーブル掛、早くごちそうを出しとくれ」といいましたが、ごちそうは何も出ません。

息子は、とても悲しんで森に行き、大きな木の下で泣きました。オームがやって来て「やさしい人よ、悲しまないでおくれ。この山の後（うしろ）の小川のほとりに、一本の黄色の棒がある。早く、とってお帰り、早く取ってお帰り」と言いました。息子が小川に行ってみると黄色い棒

が一本あったので、それをひろって、又、あの宿屋に泊りました。

宿屋の主人は、夜中になると、そっと息子の寝ている部屋にしのび込み、あの黄色の棒を見つけようとしましたが、暗くて見えません。その時、寝ている息子が「黄色の棒、性悪ものを打っとくれ」とつぶやくや、暗やみの中から、黄色の棒が飛んで来て、主人を打って打って、うちのめしました。主人は打たれながら「あゝ、許してくれ。全部返すので、許してくれ！」と叫びました。息子は、大声に、びっくりして目を覚し、主人から、わけをきいて、やっと今迄のことがわかりました。

宿屋の主人は、盗んだ黒いめんどりと、青いテーブル掛けを、息子に返しました。

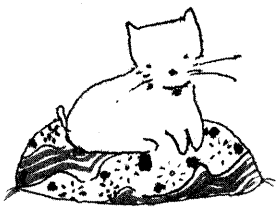
息子は、今度こそ、ほんとに金の卵を生む黒いめんどりと、ごちそうを出す青いテーブル掛けと、黄色の棒をかかえて、家に帰りました。

それから、息子とおっかさんはいつまでも、幸せにくらしました。息子はもうオームに会うことはありませんでした。

（かっこう文庫主宰）

子どもの会話
（その五）

無藤　隆



会話は、会話者が協同して、共通の何らかの「世界」を作り出すことだと見なすことが出来る。幼児において、それがどこまで可能かを、このシリーズでは眺めてきている。目の前の物そのものの実利的な意味から離れて、その物に支えられつつも、ある違った意味を作り出していく。と同時に、その意味を新たに作り出す過程は、子ども同士のやり取りの中で、交渉を通じて成り立つものである。

ここで、意味とは何か。交渉とはどんなことか。それは、現在の所、一般的、抽象的に述べるより、具体的な例に即して語った方が良いようである。

今回は、会話が協力であるということ、そして、幼児でも、5歳ぐらいになれば、かなりの会話が出来るのだということを、5歳の二人の女の子が積木で遊んでいるところの例で分析しよう。

例1

K　作ろう、あたし。（積木を出して、横に並べる。）

M　公園作る。

K　あたし、公園のさく作る。

M　じゃ、わたし公園の中作るよ。

K　これが入口だから、これちょっと開けるよ。

遊びを開始してすぐに、二人は何を作るか、テーマを設定する。そして、さらに、分担も決められる。この二人は普段から仲良く遊んでいるので、すぐにテーマが何のいざこざもなく決められたのだろう。Kが初めに作り始めたとき、何を作るかのイメージを持っていたかどうか分からないが、Mが「公園」と言ったとき、即座に受け入れ、「公園のさく」を作ることにする。おそらく、現に積木を並べており、それが「さく」にふさわしく感じられたのだろう。続いて、Mは、「公園の中」を作ると言う。公園のさくを作ることを認めれば、公園が成り立つためには、中を作る必要がある。そして、さくとなる積木の面なりに囲まれ始めた空間が見えてもいる。

このやり取りでは、相手の提案の承認は、いちいち受け入れの返事をすることによってではなく、相手の発話内容を発展・展開させることによって行っている。それは、仲が良く、相手の話を受け入れようとしていることに加え、二人が対等の関係を作っていることにもよる。その上に、積木の構成が目の前にあって発言を支えていることも見逃せない。

協力関係がなぜ分担の形を取るのであろうか。例えば、全く一緒に作っていっても良さそうなものだ。このような分担はこの例に限らず幼児、特に年長ぐらいに良く見られる。分担が出来ることは既にかなり高度な達成だ。しかし、同時に、全くの協力体制ではないのかも知れない。むしろ、一人遊びによる没入を部分的に可能にし、まだ不完全な伝え合いの技能を補うために工夫された形なのかも知れない。

ともあれ、テーマが定められ、二人は各々組み立てを始める。そこで早速、Kは入口を作る。これは、公園の

入口に違いない。テーマに沿ったものである。その入口は、実は、積木の列が角を作っているところをずらして、開けたものなので、この列（＝さく）が角を作っていることで一つには思い付いたのだろう。そしてまた、公園のさくなのだから当然入口が必要だということ、さらに相手が中を作っているのだから、そこに外から入れる必要があるとも感じたのかも知れない。

この入口を作るのは、実行すると同時に、その旨発言されている。相手に確認を明示的に求め、協力を緊密なものとすると共に、相手の存在を尊重している。と共に、相手が異議を唱えるかも知れないことは、殆ど考慮していないようだ。事実、滅多に異議を唱えない。

少しして、二人は次のようなやり取りをする。

例2

M　でも、何かちっちゃいんじゃない？

K　あ、もうちょっと。（さくを広げる。）

M　ちょうどこうすればさ、入口になるんじゃない？

（さくの端を動かす。）

K　動物園作れば？

M　そうだね。

K　動物園の方がいいわよ。

もうちょっと広く、動物園、動物園。（さくを広げる）

M　動物園ね。

K　動物園はこういう風に広いでしょ？

M　うん。（四角の薄い積木を2枚縦に積み重ねる。）

「公園の中」に物を作って置いてみると、意外に狭いことに気付いて、Mはそのことを指摘する。それはおそらく、さくを広げろというKへの要求でもある。さくを作っているのがKであることは互いに了解済みのことであるから、Mはそれを尊重して自分では手を出さない。中を作るのに狭いと、自分の側からの意見を述べる。Mは、この発言の前に、「階段」を中に入れている。そして、「でも」と言って、物を置くことは出来なくはない

が、しかし狭いのだということを強調している。Kは、さくは自分の分担だから、Mの指摘を要求と受け取り、すぐに広げている。

続いて、Mは、入口を作る。以前にKが行ったことを取り入れている。相手の分担に手を出しているわけだが、「すれば」、「なるんじゃない？」という言い方で相手への示唆という形を取り、分担を尊重している。

Kは、唐突に、動物園を作ろうと言い出す。Mは、「そうだね」と賛成しているようなのだが、例1にあるような発展的な受け答えをしていない。Kはそれを感じ取ってか、発話を繰り返し、その上で、さくをさらに広げながら、広いことと動物園とを結び付けている。広くするのは動物園を作るからだし、せっかく広いのであれば、公園より動物園の方が良いと言いたいようである。

確かに、公園と動物園は、遊ぶ場所で、さくに囲まれ、中にいろいろなものがありという点で似ていながら、子ども達にとっては、公園は近所の公園を連想して狭く感じられ、動物園は広いのかも知れない。Mはその理由を挙げられ、一応説得させられたようである。積木を組み立て始めている。

公園と動物園は、いま述べたように似ている。子ども達が作ったものもこの時点では、公園でなく、動物園でも当てはまる。そこで、見立てを変えても困らない。テーマの変更は、その点でも受け入れ可能であった。もしかしたら、Mはまだ公園のつもりなのかも知れないが、これまでの物やそれと関連した行動の上では、矛盾は起こらない。

このやり取りの後、Kは様々な動物をめぐっての発話を行う。

「（中を指して言う。）この辺にも、動物の。今は、動物はおるすです。」

動物に当たる物がいないことをうまくごっこの世界の中の話として位置づけている。また、

「（Mの作っている物―おりにも見える―を指して）なーにそれは。何がいるの？　ここはペンギンとかがいるところよ。」

Mの作っている物を動物園のおりと見なし、何が住んでいるのかを決めている。

「(中に三角の積木をすべり台のように置いて)ここはペンギンのとこ。ここはペンギンのとこ。滑られるようにした。あのね、みわちゃん聞いて。ここからピョンて乗るでしょ。そしたら、こう来て、スーって滑るの。」ペンギンが住むというという案を発展させている。

「(Mが入口を作っているのに対し、そばに三角を立てて)はい、ここは動物園ですっていうしるししてあんの。ね、みわちゃん。」これに、Mは、「うん、いいよ。」とうなずく。

Mは、はっきりとかつ積極的に動物園を作ることを認めているように思えない。最低限の返事はするものの、Mが作っている物は、以前の公園の一部としても通るものばかりだし、動物に関連した見立てに乗っていかない。それに対し、Kは、自分の案に活気づき、また、Mの消極ぶりを感じ取ってか、しきりに動物についての見立てを行い、Mの同意を求める。「動物園のしるし」といういかにも動物園であるということを強調する見立てにMもうなずく。

その後で、そばにいた先生に、Kは、「先生、動物園作ってる」と言ってから、Mに、「ね、動物園ね。」と同意を求めている。が、Mははっきりと同意を示さない。その後、Kは、再度、「動物園のしるし」を作ることを持ち出すが、Mに無視され、結局、動物園の見立てはそこで終わりになる。そして、公園ないし遊園地という感じの物が作られていく。

Mは、動物園の案に最低限の同意は示し、また反対はしていないものの、おそらく、公園を作りたかったようだ。Kが動物園にこだわっている間、Mは、さく、入口、池、トンネルなどを作っている。

しばらく、二人は、いろいろなものを作って、工夫している。面白い形の積木に触発されながら、公園のテーマにふさわしいものをこしらえる。例えば、虹型の積木を出してきて、Mが、「虹、虹。ここ何にしようか。ここトンネルにしようか。」K、「違う、ここくぐって行く

の。」M、「いいよ。もう一つあるのね。」という具合いに、虹型の積木を虹に見立てることから、公園にあり得るトンネルとし、さらに、すでに作ってある入口と関連づけている。

この後、狭くなったので、壊して、作り直すことになる。その際、Mは、「もっと広い、えーと、動物園にしようよ。」と、初めて、進んでKの動物園のテーマを認める。Mにとってやはり以前のは公園であって、それを壊して初めて、動物園に出来たのであろう。と同時に、Kがこだわったテーマをここで尊重したのであろう。が、しばらくして、結局、二人は、「遊園地」で合意する。K「遊園地でもいいじゃない」、M「うん、遊園地にしようか。」

この二人の協力の様子を眺めてきた。何を作るかの合意の元で、作るものを分担して、各々の工夫を尊重しつつ、所々で、相手の確認を求めていく。何を作るかのテーマは重要なもので、双方の積極的な合意がいる。その合意はうなずくだけでなく、そのテーマにふさわしい貢献を見立ての発言や物の作成で示す必要がある。何が作られていくかは、物自体の特性と、それまでの展開によって作られた物の集まりの形とその見立てによる「世界」のあり方を受けて、決っていく。その際、互いにどう考えているかを伝えあい、発展させることがしばしばだが、同時に、全くの合意が成り立っていない場合もあり、それも行動やごっこの世界にひどく矛盾を起こさなければ、ある程度容認される。ここでも、また、協同遊びまた会話は、参加者の交渉により成立ち、維持されるのだが、その交渉は、参加者各々独自の志向を保持しつつ、共有された世界を構築しようとするものなのである。

（お茶の水女子大学）

もう一つのカナダ
——いま、極北の子どもたちの周辺で——

鍋谷　智恵子

エスキモーという名前は、南方のアルゴンキン・インディアンが「生肉をたべる輩（やから）」という意味で、ベーリング海峡からグリーンランドに至る極北地方に住む人々につけた名前だ。そのエスキモー自身は、この言葉を蔑称だとし、本来の呼び方『イヌイット』という名称を用いている。『イヌイット』というのは、彼らの言葉で『人間』という意味。生き物としては、彼らと他の動物しかいない北の極地において、彼らだけが『人間』だったのである。今日、『イヌイット』という呼び名は、カナダにおける公称にもなっている。

二年間の予定のカナダ留学も、そろそろ終わりに近づいた頃のこと。その『人間』に、よく似た『日本人』の私は、イヌイットをたずね、バフィンランドの3つの村を訪問する機会を得た。極北という、もう一つのカナダでの、ほんのわずかの生活体験で私が垣間みて感じた、子どもたちを取り囲む様子をレポートしてみたい。

◎子守り歌

「私たちイヌイットにはね、昔っから、一人一人の子どものために歌を作る習慣があったのよ。」

人口二千人のイクァルイット（かつては、フロバシァ・ベイと呼ばれた）で小学校の教師をする、イヌイット女性、メァリー・カズンさんは話してくれた。子育てに携わった者が、その赤ちゃんだけのために作り、家族の間で、その赤ちゃんのためだけに歌われるこの歌をアカウス（aqausiq）という。

「メァリーさんのアカウスは？」との私の勝手な質問に彼女は困った顔をした。子育てに関係がない者の前で歌って披露などするものではないらしい。

無理なことをせがんだと、後悔しながらも、なんとか、そのアカウスを聞いてみたいという気持ちでいた私に、メァリーさんはこう続けた。

「でもね、アカウスの中には、その赤ちゃんが、大きくなり、年老いて亡くなった後、家の者に歌い継がれ、村に広まり、今ではわらべ歌のようになったものもあるのよ。一つ歌ってみましょうか。」

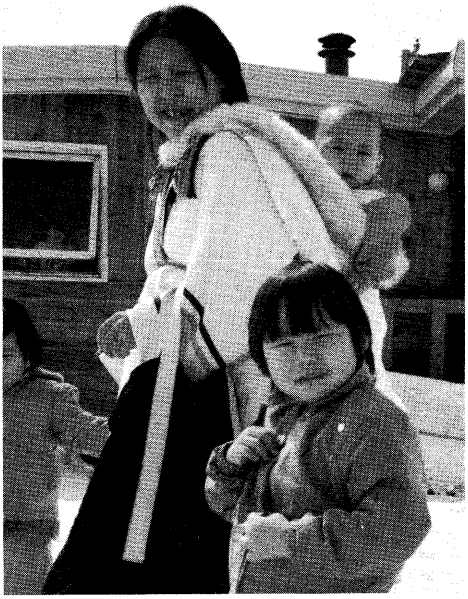
「ぜひ、お願いします！」

胸が踊る気持ちでそう答えた。

うれしいときは、おもいっきり
飛び跳ねてごらんよ
おまえは　ちっとも　きれいじゃないけど
私にとって　一番すてきな子
たとえ雪が降っていても
元気に外で遊んでおいで

『語り』とも言えるこの歌、とてもやさしく耳に響いた。撥音の多いイヌイット語の独特の音節が、単調ともいえる音の流れにリズム感を出している。メァリーさんに英訳してもらったものを邦訳してみると、前記のようになった。子守り歌――ちょうど、そんな感じだ。イヌイットの母が子をおぶり、口ずさむ――そんな様子が目に浮んだ。

「今じゃぁアカウスをもつ子どもも少なくなってきてね



……。」メアリーさんは、寂しそうに語った。

◎近代化の波

狩りだけで暮らしているイヌイットも、めっきり減ってきている。村に住むようになった、多くのイヌイットは、学校や公共機関、発電所、飛行場などで働くようになり、狩りをやるのは、週末ぐらいのもの。しかも、かつての犬ぞりに代って、スノーモビルが普及した。

定住生活をしているから、行く先々でイグルー（氷の家）を作っては夜を過す、という昔ながらの狩猟生活は、ほとんどみられない。狩りに泊りがけで行く際には、テントを携帯する。イグルーの作り方を知らない若者が増えたと、年輩のイヌイットは嘆いていた。

今では、大部分のイヌイットは、暖房のきいた建物に住み、通信衛星が中継してくる英語のテレビ番組を楽しむ。電話も普及している。

急速化したイヌイット社会の西洋化は、白人カナダ社会による、極北地域の植民地化でもある。ひとつの民族が、彼らの力ではどうしようもない力で支配される。それが、伝統文化の崩壊ということでもある。

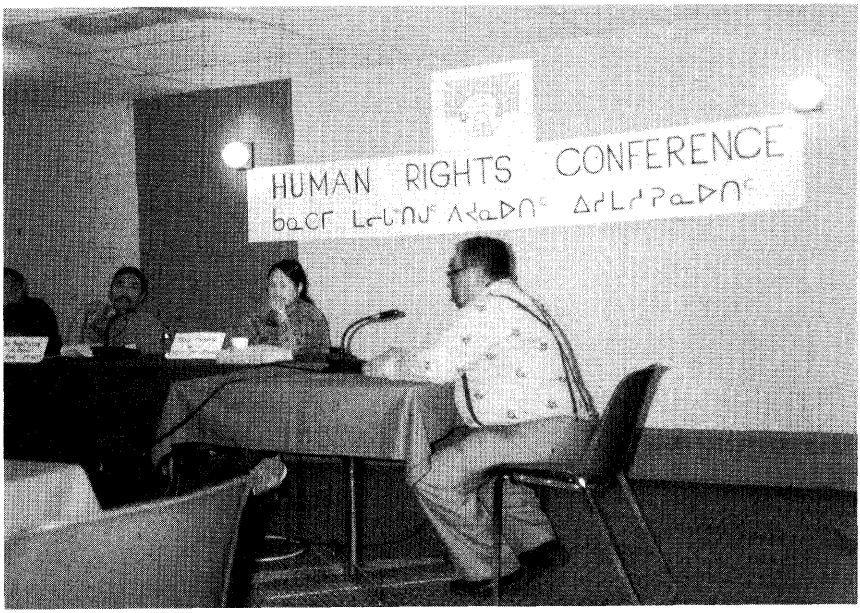
◎母語としてのイヌイット語と学校教育

現代の子どもたちとの心の隔りを感じてやまない、民間のイヌイットの間では、伝統を守ろうとする意識が、次第に高まってきている。

滞在中、イクァルイットで、カナダ連邦政府の主催により、人権会議が開かれた。会議は、オタワからやってきた四人の政府関係者と、バフィンランドの主たる十二のコミュニティーからの代表者が参加し、一般公開で、行われた。

子どもの教育、福祉問題、青少年の非行問題、そして労働問題と、今日イヌイットにとって深刻な社会問題を、人権の側面から、四日間にわたって討議した。これらの諸問題に共通するのは、急激なイヌイットの伝統文化の崩壊によって、イヌイットの人権が侵害されつつあるということ。教育の面からの立て直しを図ろうという訳か、教育問題が問われた日は、最も活発に民間の参加があった。

「このように『人権』について話す機会を私たちの土地で行うことができるようになったことを、本当にうれしく思います。……私が子どもの頃、そして、ついこのあいだまで、私たちイヌイットは、白人のカナダ人が支配する政府に対し、自分たちの権利を主張することが、



それも、自分たちの言葉、イヌイット語を使って主張することが可能だとは、全く考えてもみなかったからです。」

年配のイヌイット女性、ポウリエ・パトンさんのこんな言葉が、印象的だった。

ついこの前まで、イヌイット語を母語とする子どもたちにも、南部から来た教師による英語での学校教育が強いられていた。その結果、イヌイット語を話さない若者が増えるという危機に直面した。

二、三年単位で北の奥地へやってくる南部カナダの教師に、イヌイット語への『思いやり』を望むことは、難しかった。しかし、言葉が、その文化の中核であることを思うと、イヌイット語の崩れは、その文化の崩れであり、それに拍車をかけたのが、英語による学校教育の普及であろう。イヌイット語での教育には、イヌイット社会で育った教育者が必要である。二年前に、モントリオールのマックギル大学の指導のもと、イヌイットの教員養成専門学校がイクァルイットにできた。現在、生徒数は、一年生八人、二年生六人。もちろん、メァリーさんを含め、これまでにも、南部の大学で教育を受けた、イヌイットの教育者が数名いた。しかし、今後は、バフィンランドにいながらにして、教師の道を進むことができるようになったのである。

イヌイットの文化を、内側から把握する者が、イヌイットの教育にどんどん、携わる日が近いのは、喜ばしい。

◎伝統が息づく食生活

日本で生れ育ってしまったよそ者の私にとって、とても新鮮で心踊る体験も、そこにはたくさんあった。

例えば『食事』これが、イヌイットの生活に導入されたのも、ごく最近の話。近代化の側面にすぎない。食事とはいったい何か。人口四百人足らずの村、ブライトン・アイランドのアウドラキアック家を尋ねたとき、そう問わずにはいられなかった。

朝食、夕食といった一定の食事時間や食卓を囲む情

景、家族、友人。そして栄養のバランスや調理の方法——食事にまつわる、ありとあらゆる連想。しかし、こういった意味の食事は、イヌイットには存在しない。いや、かつて存在しなかった。ルポライターの本多勝一氏によると、本来、イヌイットにとって食事とは、腹が減ったとき食べ物を胃袋につめこむことである。お腹がすく。だから食べる。アウドラキアック家の台所の調理台には、カリブー（トナカイの一種）の生肉のあらゆる部分が、凍ったまま置かれている。台所の隣りの部屋で、夕方、家の皆といっしょにテレビを見ていたら、子どもも、おとなも、てんでんばらばらに台所のすみへ行っては、ナイフで生肉を切り食べている。三、四才児のナイフさばきは、大したものである。

おもしろいのは、よその子どもも、ふらりと家へやってきたかと思うと、勝手に台所の調理台の方へ行き、生肉をしゃぶっていること。私自身、この勝手な生肉しゃぶりを、いっしょ楽しんだおかげで、『夕食』抜きにはならずに済んだ。

今では、私たちが連想するような『食事』もするが、生肉しゃぶりも、不可欠な日常生活なのである。

もう一つ、食べ物の話をしよう。

イヌイットが、アザラシを食べることは、広く知られている。アウドラキアック家に滞在中のある週末、主人がアザラシを捕えて狩りから帰ってきた。イヌイットの男たちにとって、獲物を捕った後の解体ほどうれしいときはない。

主人は、まるまるとしたアザラシの中央をまっすぐに切り開き、あとはちょいちょい生肉をつまんでは、口に入れながら各部を処理している。無駄にする部分など全くない。

獲物を祝い、ナイフを片手に、近所の人が、子どもとおとなあわせて六人やってきた。切り開かれたアザラシは、ぶ厚い脂肪のために円形を描いている。それを皆で囲むように座り込んで、いろいろな部分を、切っては食べ切っては食べ。楽しそうだ。うれしくてたまらない。

獲物を祝う。獲物を捕らえた男を祝う。――その活気は、生肉を食べることに対する私の心理的な抵抗を、どこかへ吹き飛ばしてしまった。

◎折り紙に挑む

こんなこともあった。

先に紹介した、メァリーさんの頼みで、彼女が担任の三年生の教室へ折り鶴を教えに行ったときの事だ。二十人程いる児童の教室の前で模範をみせる私に、きわめて静かについてくる子どもたちに、私は驚かされた。たまに声が上がったかと思うと、「次はこうでしょ？」と、先を考えながら、自分で進もうとする。

これまで、カナダの南部の小学校でも、同じようなことをしたが、その際、子どもたちはきまって、わいわ

い、がやがや、「これでいいの？」と、何度も私の方へ確認のために声をかけてきた。また、一つ出来上がると、その完成したものを大切にし、また新たに他のものを作りたがるが、もう一つ同じものを使ることには、あまり関心を示さなかった。

イヌイットの子どもたちに折り紙を教えてうれしかったのは、家に帰ってからも、何度も自分で作ってみている子どもが多いことだ。買い物に雑貨屋へ行ったときに、以前、折り紙教室で会った子どもに再会した。子どもはその場で手近な紙切れを持ってきて、正方形を作り、店の隅へ私を呼び、私の前で自分が一人で折り鶴が折れるようになった事を得意そうに見せてくれた。〃自分で出来る〃ことの喜びを伝えてくれたのだ。これは、多くの南部の子どもたちが、折り鶴を〃持っている〃ことに喜びを感じている〃のとは、随分違うようだった。

◎おわりに

メァリーさんに、アカウスの話を聞いた日の翌日、私

はカセットテープを持って再び、彼女に会いに行った。「ぜひ、メァリーが歌う、イヌイットのわらべ歌を録音させてほしい。」と、お願いすると、うれしそうに、四つの歌を続けて歌ってくれた。

●カヤックをいっしょうけんめいこごうよ
●お母さん、昼間、星はどこへ行くの
●パンツの中のしらみタイジ
●小鳥がやってきた

こんな題名のそれぞれの歌は、わらべ歌独得の音のおもしろ味、自ら口遊(ずさ)む楽しさがある。そして、メァリーさんの歌には、これらの歌を歌い伝えたいというイヌイット女性の願いが込められ、どこか哀愁が漂う。母語、文化、歴史、そういった民族全体の危機を感じて、なんとかしなければ――という切なる思いであろう。

年長者の子どもの頃の文化に対するどこか感傷的な思いは、伝統文化を守る動きにつながる。国家の統一性と民族の独自性をいかに調和させていくかという現実問題を問うためには、そのような感傷的なエネルギーは、今日大切なのである。

モザイク文化が文化の特徴とされるカナダでの話である。同質性が強いとされる日本の中では、少数民族に対する問題、強いては、社会的弱者とされる障害者の問題が、より深刻であることを忘れてはいけない。

移民の国、カナダで、移住者たちより、はるか以前に大陸へやってきたイヌイット。様々な文化と自らの伝統。多様化していく価値観の中でも、伝統文化の心は忘れないでいてほしい。

（ウィンザー大学修士課程修了）

〈参考文献〉

○「子どもの文化人類学」原ひろ子　一九七九年　晶文社
○「カナダ＝エスキモー」本多勝一　一九八一年　朝日文庫
○「エスキモー・極北の文化誌」宮岡伯人　一九八七年　岩波新書
○「北極探険十二回」C・W・ニコル（竹内和世・訳）　一九八七年　新潮文庫

一歳六ヵ月児健診経過観察における遊びグループ指導の展開

その2

上垣内伸子　古屋喜美代
市川奈緒子　山崎　聡子

「幼児の教育」六十二年十月号にて紹介させて頂いた日本保育学会第40回大会発表研究の中で、H児―母―保育者の毎回の活動記録をまとめた表が欠落していたので、改めて載せて頂くと共に簡単な補足説明を加えることにする。十月号のH児の事例検討のうち、五十九頁〜六十一頁の「遊びの会」の活動におけるH児の変化について述べた部分は、本表をもとにしたものである。

H児－母－保育者　活動記録

	H　　児	母	保　育　者
5月 シーツで遊ぼう	挨拶～輪にはいりしっかり参加する。 表情が少なく、動かずに周囲を見まわすことが多かった。1人で壁ぎわにいる。 発話も少なく、働きかけへの反応も弱い。	どのようにふるまえばいいのかわからずとまどっているようだ。 一歩さがって見ていることが多い。	母に対して「～やりましょう」とことばかけをする。 ――保育者が誘ったことだけ母は行った。
6月 小麦粉粘土	挨拶～うれしそうに返事をする。 粉にさわるのを嫌がり手を出さない。 他の子やボール、他の遊具の方へと動きまわる。 他児への関心が増し追いかける。	H児が他の母子へ近づくとすぐに連れ戻そうとする。 迷惑をかけるのではと気を使っているようす。	終始興味の向く方向へと動きまわるH児に即して動く。
7月 紙ちぎり～ 紙ボール	挨拶～自分の順番まで待てるようになる。 テーマ遊びの中で、興味のあることに対しては集団の流れにのっていくが、ないものには全くのってこない。また、好きなことは終わってもやり続ける。 発話量がふえたが、会話は成立しにくい。 保育者のことばかけへの対応にもムラあり。	H児と母。平行遊びのように2人並んで黙って紙ちぎり。 『一緒に何か1つのことをやる』という行動はみられなかった。 母からH児への働きかけ・誘いかけが少ない。	㊝『Hくんのところへ行こう』 ㊞『あの子がここへ来ればいいのよ。』 三者関係的または1対1のやりとり遊びや共同作業をひき出そうと試みる。
8月 フィンガー ペインティング	挨拶～返事の後で手をたたいてうれしそうな表情。 えのぐを手でさわることを非常に嫌がり、絵筆を使って楽しむ。 他児の汽車ごっこにとんでいってはいる。 大声を出し、『一緒』の楽しさがうかがえた。	全体的に余裕のある態度。 H児に対しても禁止はせず、やりたいことをさせていた。 他児の母とも話がはずんでいた。	母子共に、場に慣れていい感じで参加できていると受けとった。 少し変わってきたなと思う。
9月 砂遊び (外の公園)	挨拶～歯科健診で泣いた印象が残っていて保健所に対して抵抗がある様子。 緊張して母にくっついている。 最初は集団にはいっていけなかったが他児の誘いかけで案外すんなりとはいっていった。 砂に対しても抵抗を示したが、興味が出てきてどんどん遊べるようになっていった。 よくしゃべるが、指示理解の力は弱い。	危険な場面でもH児を追っていくという行動はない。 「この子は～するのはダメだ。憶病だ」等と思い込んでH児を見ているようだ。	H児に対して「(バケツの土を)あけて」「ペタペタしよう」と指示的な誘いかけを多く試みる。 母に対してはH児の（母の持つイメージとは）異なった行動を評価するようなことばかけ。
10月	父と外出して休み。(H児は以前と違って父との外出を非常に喜んだとのこと)		
11月 箱積み木～ おみこし	挨拶～のってこない。機嫌がよくない。 手作業はほとんどしなかったが、全身運動が始まると喜んで参加してきた。	遊びへの参加は消極的だった。 昼食後、『イナイイナイバー』が始まると、何度も何度も楽しんでいた。	個人的な遊び(手を使った作業)の場面で、H児への誘いかけを意識して積極的に行った。
12月 X'マスツリー	挨拶～元気がいい。体操も真似をして一緒にできた。 ツリーの飾りで、食べる真似をしたり他児へ渡したりととてもよく遊んだ。 他の子ども達と一緒に、そり・すもう・汽車ごっこなど関わりを多くもって遊んだ。 表情が大変豊かだった。	H児に対する信頼感が増したのか、ゆったりと2人で楽しく遊んでいた。	母に対して非常に話がし易くなった。うちとけてきたと感じた。
1月 汽車ごっこ	汽車ごっこはお気に入りの遊びでもあり、終始はしゃいで楽しく遊ぶ。他児と一緒のダンボール箱の汽車に乗って、周りの大人に手を振ったり顔を見合わせて笑うといった交流があった。 「おかあちゃん」と大声で母を呼んでは走っていくことが何度もみられた。	H児だけでなく、他児とも遊んでいる。 明るい表情。 スタッフの中に加わって仕事を手伝ってもくれた。 2人めの子どもが欲しくなったと保育者に語る。	母の方から保育者にどんどん話しかけてくる。 他の母へも同様に母の方から話しかけていくのを見て驚いた。
2月	母流産にて休み。（3度めの流産。「もう2人めは無理かもしれないが、H児1人でもいいという気持ちになってきた」と連絡があった。)		
3月	彼岸の墓参のため休み。(「別の日なら参加できたのに。最後にみんなに会いたかった」と残念そうだった。)		

「遊びの会」がスタートしたばかりの五月・六月は、大勢の仲間のいる雰囲気になじめずおちつかない子どもが多い。また、その子どもの様子に母親が不安になったり、禁止のことばかけが多くなったりということもありがちである。「やめたい」「うちの子には無理」というお母さんも出てくるが、昨年度からひき続いて参加しているお母さんからの「うちの子も最初はそうだった」という体験談や、不安の中から時折チラリと見せてくれる子どもの楽しそうな表情が支えとなって次の参加へとつながっていく。H児母子にとっても、五月・六月はそんな時期であり、「遊びの会」の活動に慣れてきたのは八月頃であった。この間に、心理相談員や保健婦による側面からの援助も得られるのが保健所で行っているこの「遊びの会」のメリットでもある。

H児の表情がイキイキと豊かになり、発話量も増し、母親も保育スタッフも「あ、変わったな」と確かな変化を感じたのは、十二月・一月の活動であった。一月のテーマは汽車ごっこ。ダンボール箱を汽車にみたてて走ったり、みんなでつながって走ったりする中でH児と他児との交流する姿が多くみかけられた。また、母親達にトンネル・踏切等の役割をとってもらう場面があったが、H児の母の積極的な動きがめだった。この頃からH児は、さかんに「おかあちゃーん」と呼びながら母へ抱きついていくことが始まった。「甘ったれになって」と言いつつも受けとめる柔いだ母の表情に、H児母子間の愛着関係が着

実に作られていることを感じさせられた。

このH児母子の場合も、一歳六ヵ月児健診を受診する頃、近所に一緒に遊ぶ友達がいないという悩みを持っていたが、都市部に住む三歳までの母子にとって、これは割合多い悩みのようである。筆者らが東京の他の区で一歳六ヵ月児健診時に行ったアンケートでも、一緒に遊ぶ友だちがいないと訴える者が40%近くおり、発達上の問題を持つ場合にはより割合が高くなるという結果が得られている。[1]

私たちの行っているこの「遊びの会」も、一～二歳児の親子遊びの場を作ろうという動機を持った活動であるが、こうした動きは現在各地の保健所でさかんになってきている。「育児相談」という事業を拡大させて定期的な遊びの会や絵本の読みきかせの会を組織したり、フロアの開放を行う所もあるし、児童館と合同で育児教室を開催したりとバラエティーに富んだ活動がなされている。こうした活動を行う時、何よりも頼りになるのは地域に住むお母さん方の力に他ならない。私達の活動拠点である練馬区内の各保健所では、地域の自主保育グループや文庫活動のスタッフに負うところが大である。これからも地域のお母さん方と交流しながら、活動の輪を広げていきたいと思っている。

参考　(1)第34回日本小児保健学会　一九八七年
「一歳六ヵ月児健診における生活アンケートの導入」

若いお母さんたちへ

はるにれの会

橋本　都

こんにちは。このシリーズでお会いするのも、三回目になってしまいました。この〝一年〟は、私にとってはあっという間でしたが、息子Hの一年をふり返る時、随分と違ってきたように思われます。Hも小学六年生となり身長も伸びてきて、体つきもプクッとしていた幼児の頃とは全く違ってきました。先日電話で話をすることがあったのですが、我が子ながら耳を疑ってしまう程、大人びてきて驚かされました。精神的にもだいぶ成長してきたようです。

ある夏の日のこと、Hと大阪から遊びに来ていた姪、甥を連れて、海猫の繁殖地、蕪島に行きました。この島は私の住む市の鮫という港にある周囲一キロもないような小さな島ですが、日本有数の繁殖地で、島全体が神社になっています。『ウミネコのエサ』と称して売られているエビセンを買い、辺りにまくと、それをめがけて海猫がやってきます。エサに群がる海猫をみていると、その眼の鋭さに驚かされてしまいました。八月ともなれば、ヒナ鳥も成鳥とあまり変わらない大きさになり、羽

が茶色いので区別がつくだけになってきました。

鳥の世界では、ある程度まで大きくなるとヒナとはいえ、自分でエサを求めなければならないのです。そして強者だけが生き残れるのでしょうか、エサをめぐって激しい競争が展開され、優しい眼をしたヒナ鳥がとれるようにエサを投げるのはとても難しいのでした。でも、何とかしてヒナ鳥に食べてほしくて、三人の子ども達も躍起になって茶色の鳥めがけてエサをまきました。

このような海猫の生態をみたり、夏のいくつかの出来事から、私は「人が優しくなる」というのはどんなことなのか、考えさせられました。

夏休みになると、近所の公園で町内のおじいさん、おばあさんが、ゲートボールの練習をするのですが、H達数人の子どもを誘ってくれるのでした。昨年も一昨年も老人と子どもが交じって練習していました。私から見ますと、小学生も高学年になると、体力や運動能力も母親以上になってきて、てっきり子ども達の方がうまいのかと思っていましたら、とても上手なおばあさんもいるとのこと。学校の部活動があって参加できない時は、しきりに残念がるほどでした。

老人と子どもが仲良く並んで順番を待ち、ゲームを楽しんでいる……こんな風景をみて私達母親の年代と老人がこんなに自然なかかわりを持てるだろうかと思ってしまいました。サークル活動などでも同世代が多く、親との同居以外には自然にふれ合うことはあまりないのではないでしょうか。子どもの世界は、私達からみるとわからない事も多く、閉じているようですが、かえって我々よりもずっと自然でオープンだと思いました。また老人達も子どもとの交流を心から楽しんでいるようでした。

Hは現在、私の両親、つまり母方の祖父母と一緒に暮らしています。母は、母親の私以上に甲斐甲斐しく孫の世話をしてくれます。私は仕事を持っていますし、母は専業主婦ですから、家の中のことを取りしきっているわけで、時にはなんとなく〝子どもをとられた〟ような気持ちになったこともありました。でもHは寝る時は必ず私のもとに来るのでした。言いたいこと、楽しかったこ

と、いやなことなど、布団に入ったHの横でふざけ合いながら聞くのが日課で、絵本を読んだりいろいろな話をする大切な時間でした。

さて最近、思春期にさしかかったせいか、祖母の細々とした注意を素直にきかず、いわゆる〝反抗的態度〟に出ることがありました。でもよく見ていると、Hが今やろうとしていることを先まわって命令口調で言うことが多く、やらない、だらしのない悪い子と決めつけられているような気になるらしいのです。私も「親が厳しくないから素直でない」「子どもがそういう態度の時は親も一緒になって叱るものだ。」と言われるのですが、二人の間に立ってオロオロすることもあります。でもHの様子は、まさに二十数年前の私の姿であるように思います。命令に素直にハイと言って行動していれば親は満足で気分がいいのですが、子どもにとってはまるでロボットのような気がするのではないかと思います。

こんな事を書きますと、我が家はうまくいっていないんではないかと思う方がいるかと思いますが、決してそうではありません。祖母がこんなに言うのは、仕事を持っている私にかわって育児の責任の一端を担っているという気持が強いからでしょうし、そういう気持もわかっているつもりです。それに私自身欠点の多い人間ですから、こうしてHが祖父母に囲まれて育てられることを、ありがたく心強くも思っているのです。

両親にとっても孫との生活は楽しいらしくHのために土曜の昼にホットケーキなど好きなものをつくったり、よその人に孫自慢をすることもあるようです。もし、一緒に生活していなかったら、こんな事にも興味を持たなかったかもしれないと言って、いつも喜んでくれます。でも、子どもというのは正直ですから、祖父がタバコを喫むと、途端にいやな顔をして咳をし、やめさせようとするんですね。タバコが悪い悪いと言われていても、なかなか大人は実力行使できないのですが。

それから、以前テレビで平均寿命が発表された時のことです。Hが祖父の年齢を聞き、ひき算をして「あと十二年生きるんだね。」と言ったのです。まだ現役で仕事

をしている祖父にとっては、かなりショックだったようです。こんなところが子どもらしいですね。

さて、Hには、自動車で五分位の所に父方の祖父母がいます。Hが赤ん坊の頃、同居していたこともあって、その成長をとても楽しみにしています。Hが卓球で入賞したことを報告にいくと、祖母は、まるで自分の喜びのように思い、自分の若かった遠い昔を思い出し、「私も卓球の選手だったのよ。私の時は台から離れて打ったけど、今はどう？　Hと試合してみたいわねぇ。勝てるかしら。」と生き生きとして喋り出すのです。年老いて体も弱り、記憶力も弱った祖母は何度も同じことをHに聞くのですが、Hも丁寧に答えています。子どもの未来ある姿というものは、何と老人を生き生きさせるものかと思います。

Hは家に帰ってから、「何度も同じことを聞くんだね。」とポツリ言いました。誰でも年をとるとそのようになってくるし、皆で大切にしてあげなければならないことを話しました。Hも「今何年生？」「何部に入っているの？」など聞かれ、祖母が自分のことをよく知っていると思っていただけにびっくりしたようです。

つい数年前なら、私も同じ事を繰り返し繰り返し聞かれたり、物事に固執して自分の考えをかえなかったりしたら、とてもうんざりしてしまったかもしれません。しかし、自分自身も白髪がふえ、たまに物忘れすることもあり、年月を経て人間は老いを迎え、こういう状態を受け入れていかねばならないと思うようになりました。そしてHも老人との暮らしの中で、老人の思いを感じることが少しでもできたのではないかと思うのです。

ある時、たまたま義母のワンピースの袖が少し綻びているのを見つけ、直してあげようとしました。すると、義母は、

「私はお裁縫得意なのよ。でも、同じ色の糸がなくってね。」

と言います。裁縫が得意なのは、一晩で単衣をつくったりしたのを見ていましたからよく知っています。

「お母さん、縫うのは速かったものね。まあとりあえず

黒糸でもいいし、応急処置をしておきましょう。夜は針が見えにくいし。ネグリジェにドレスアップしてきて下さい。」と言いましたら、

「あんたがやってくれるって、うれしいからやってもらうのよ。」と話し、着替えてきてくれたのです。

私にはこの小さな出来事がとても印象に残っています。誰にでもあるでしょうが、この義母の自尊心を傷つけられたくない気持が、痛いほどわかりました。そして優しく私の求めに応じてくれたことをうれしく思ったのです。

さて、父方の祖父母は同居していないせいか、Hに会う度に一段と大きくなったと思うようです。

この祖父は、眼が不自由なのですが、本が好きでいつも夜遅くまで大きな虫メガネで字を覗きこむようにして読書しています。何度か死ぬ目に会いながら克服してきました。八十歳を過ぎて、健康に気をつけながらきちんとした生き方をしている祖父をHはとても尊敬しています。

Hが六年になる時に、祖父はHを呼んで、次のような話をしてくれました。

「これから将来何になってもいい、好きな仕事をして、どこに行っても頑張ってほしい。しかし、いざという時、人から相談を受けられる人物になってほしい。」と。

私はその時の緊張した雰囲気を忘れることができません。祖父にとっては〝あと一年〟と若い人が簡単に言うけれど、その一年さえ生きているかどうかと思うのだそうです。ですから、Hに言っておきたいと思ったのでしょう。こうして祖父が孫を一人前の人間として話をしてくれたことに感謝したのです。

話は変わりますが、先日、久し振りに中学時代の友人に会いました。彼女には三人の子どもがいるのですが、末娘が障害児です。出産は正常でしたし、少し大きくなるまで気がつかなかったとのことです。ただ上の二人に比べてあまり泣かず、大人しい手のかからぬ子どもだと思っていました。医者の話だと先天的なものではなく、

そういえば生まれてまもなく高熱をだしたことがあったとか。

彼女は毎日、養護学校に併設されている保育施設に治療訓練と保育のために通いました。上の兄や姉もはじめは赤ちゃんだから、歩いたり言葉を言ったりできないのだと思っていたそうですが、今では妹の状態をわかりながらも、一緒になって喧嘩したり、とてもよく面倒をみてくれるようです。

私がこの友人に感心するのは彼女の生きる姿勢です。末娘が歩けるようになると、知り合いの障害児を受け入れている保育園に入れ、その時間、自分は叔母さん御夫妻が経営している障害者の授産施設で働きはじめたのです。しかし、来年から養護学校に入学することが決まったものの、学校が効外に移転することになり、送り迎えに時間をとられるので、勤めの方は辞めざるをえなくなりました。

これまでにはどんなにか苦労があったと思いますが、いつも落ちついて、最近はこんなことに興味がでてきて、いたずらで大変と語る彼女の姿に圧倒されるものがありました。

それにしても、養護学校に入るのも申し込みが多く、大変なことを初めて聞きました。彼女は「たまたま運がよかった。」と言っていましたが、就学猶予にしなければならないケースも多いのだそうです。学校に入ることはどんな子どもにも保障されていると思っていましたのに、身近なところにこんな問題があったことを知りませんでした。

今や学校は知識のみを得る受験競争の場となっている感があります。しかし、もっと大切な、家庭とは違ったいろいろな人々との関わり、新しい物との関わり、そしてそこから産み出される新しい可能性をもたらす場であることを忘れているのではないでしょうか。

実は私は高校教員をしているのですが、高校生でも、ちょっとした言葉の行き違いから無視されたと悩む例があります。友人との付き合い方もぎこちなくて、自分をうまく表わせぬまま、他人に合わせすぎて辛くなった

り、反対に人の気持を全く考えず、自分をコントロールせずに行動する。そして他に求めるばかりで自分が他のために行動することができないなど、どうも人間関係がうまくゆかないのですね。家庭でも社会でも、いろいろな子どもや大人がいて、いろいろ困ったり悩んだりする中で生きていくという訓練がなされてないように思います。

とりとめもないお喋りをしてしまいました。

私自身、Hを育ててきたことを思い返せばこれまで述べた事などほとんど考えていなかったでしょう。例え考えていたとしても観念的なものにすぎなかったと思います。しかし、現実の生活の中で、私は私としてありのままに触れることができた時、少しでも「優しさ」を持つことができるのではないかと思います。

そして、幼い者が育つうえで、いろいろな形があるにせよ、老人とふれあったり、世の中には弱い立場の人々がいて、困っていることもいろいろあるのだということを、シャットアウトしてはならないのだと思いました。

お恥ずかしい話ですが、もう七、八年も前の事ですが、私は一度だけ、息子の前で泣いたことがありました。大抵はどちらかというとボャーッとしている人間ですが、あの時は母に自分の気持を全く理解してもらえなくて悔しくて涙がとめどなくこぼれたのです。Hは私が具合が悪いと思ったらしく、タオルを絞ってベッドに寝ている私の額にのせ、横に顔をすりよせてきたのでした。そして一言もいわず、じーっとしているのです。私は今度はうれし涙が出てとまりませんでした。

普段は生意気な少年であっても、時として自然に祖父の手をひいたりしているのをみて「優しさ」というものは、大人が口で教えることではなく、もっと奥深いところで自然に湧くようにして出てくるものであると感じています。そしてこの優しさが、強さ、勇気につながるような生き方をしたいものだと思いました。

正月早々、話しとしては少々暗くなるかもしれませんが、「一体、生活ってなんでしょう」

東京は、世界で最も物価の高い町だそうです。土地ブームのため、地価がものすごい勢いで上昇し、億のつくマンションが、まるで当り前のようになっています。一般サラリーマンにとって、もはや一軒の家を持つことは、夢のまた夢となりました。しかし、私達にとって、自分の持ち家をもつことは、やはり、かなえたい夢のベストワン。

家の夢を実現させた人々の多くは、ローンにその半生を費やすことになります25年、いや30年のローンを組み、老後やっと家が、本当の意味での持ち家となります。

生活は、その間、ローンに縛られてしまいます。賃貸であっても、住宅に費すお金は同程度かもしれません。しかし、賃貸のよさは、いつでも、自分の住まいを変えることができる気軽るさにあります。そもそも住まいは、人間の生活のスタイルに合ったものであるべきです。若い夫婦には、1DK、子供ができたら、3DK、そして、再び夫婦だけの生活になったら1DKにもどってもいいのではないでしょうか。住まい自体の大きさと共に、居住場所も移動するはずです。

今、日本（特に東京）は、生活することが、その意味自体から、考えなおされる時に来ているのではないかと思います。ヤドカリのように、自分の体に合った居心地の良い生活のために、住まいの占める割り合いを、考えなければなりません。ひとりひとりが、自分の生活を考え始める時、きっと少しずつではありましょうが、住宅へのかかわり合いも変化してくるのではないでしょうか。

今年、また私は、十一回めの引越しを初夏にすることになっています。少しやりすぎの声も聞こえるこの頃です。

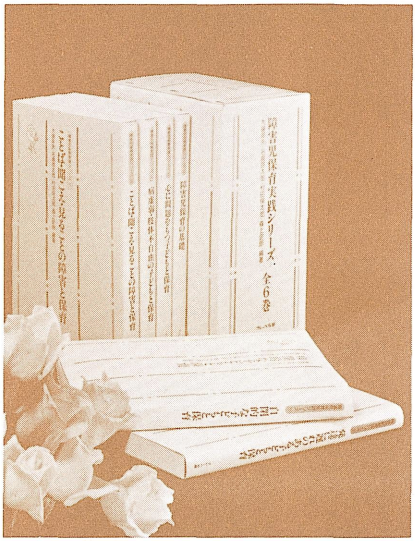
幼児の教育　第八十七巻　第一号
一月号　©
定価　四〇〇円
昭和六十二年十二月二十五日　印刷
昭和六十三年　一　月　一　日　発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本　田　和　子
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九―一九六四〇番
⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

障害をもつ子の保育に必要な配慮はなにか？

豊富な事例、適切な助言、保育現場に役立つ実践指導書

障害児保育実践シリーズ 全6巻



大場幸夫・名倉啓太郎・
村田保太郎・森上史朗　編著

本シリーズの特色

1. 障害児の発達の姿を共感的にとらえて、園での保育のありようを考えます。
2. 実際例をたくさん出し合って、具体的に指導のあり方を考えていきます。
3. 障害児ひとりひとりの個性を大切にする保育、人間としての育ちを大切にする保育を追求します。
4. 実践者のナマの声を通して、保育に必要な点を探ります。
5. 豊富な事例、適切な助言、保育現場に生かされることを目的とした実践指導書です。

第1巻	自閉的な子どもと保育
第2巻	発達に遅れのある子どもと保育
第3巻	ことば・聞こえ・見ることの障害と保育
第4巻	病虚弱・肢体不自由の子どもと保育
第5巻	心に問題をもつ子どもと保育
第6巻	障害児保育の基礎

A5判・セットケース入り

各巻平均264頁　セット定価10,800円

<わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

'88 フレーベル館 月刊絵本ラインアップ

保育絵本9誌の新しい企画、夢が大きくひろがります。

ゆたかな情操と創造する心を大切にする
キンダーブック①〈情操〉

A4ワイド判／34頁／特別付録「ワイド版カラー工作」「シール」「こいのぼり」／280円

●年中児を対象とした生活絵本。
●季節感、生活感を盛りこんだ「おはなし」「特集」などを、楽しく展開していきます。

観察する目と 考える心をそだてる
キンダーブック②〈観察〉

A4ワイド判／36頁／特別付録「おもしろめいろブック」「シール」「こいのぼり」／280円

●年長児を対象とした生活絵本。
●子どもの生活観察する目を通して必の成長をそだてるお手伝いをします。

はじめての生活絵本
キンダーブック ジュニア

L判／22頁／付録母親向け解説書（こぐま通信）／4月号特別付録「シール」「こいのぼり」／250円

●年少児を対象とした総合生活絵本。
●新しい心の芽ばえを育てる豊かな題材をお届けします。

自然の不思議を
感動的に伝える
しぜん―キンダーブック③

L判／32頁／上製本／特別付録「こいのぼり」／330円

●子どもの興味と関心の芽ばえに身近な動物を通してやさしく語りかける科学絵本。
●美しいスーバーリアリズムの世界！

園生活で
はじめて出会う絵本
ころころえほん

AB判／20頁／特別付録「こいのぼり」／250円

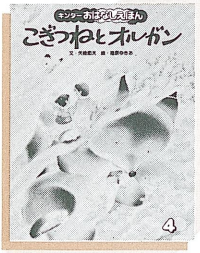
●先生やお母さんとともに、あたたかいスキンシップのお手伝いをします。
●リズミカルなおはなしを繰り広げます。

絵本を開く
楽しさをあたえる
キンダーメルヘン

L判／26頁／特別付録「こいのぼり」／250円

●子どもたちの豊かな創造力をグングン伸ばします。

夢と感動する心を そだてる
キンダーおはなしえほん



L判／32頁／上製本／特別付録「こいのぼり」／330円

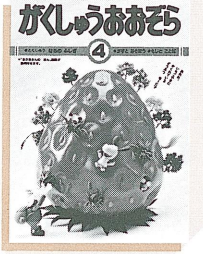
●子どもたちの夢と感動する心を大切にはぐくむおはなし絵本です。

選びぬかれたおはなしえほん
キンダー名作選

L判／32頁／特別付録「こいのぼり」／250円

●キンダーおはなしえほん20年の歴史の中から、語り継がれる好評の絵本の数々をお届けいたします。

幼児の学習意欲を 生みだす
がくしゅうおおぞら



A4変形判／36頁／別冊付録「おかあさんのほん」／特別付録「あいうえおひょう」「こいのぼり」／300円

●5歳児を対象とした総合学習絵本。
●子どもの生活から身近な題材で遊びながら、知る・覚える楽しさを学びます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館